

The Journal
of
Flannery O'Connor

◆フラナリー・オコナー研究◆

第3号

日本フラナリー・オコナー協会

December, 2023

ISSN 2188-9716

1

目次

【巻頭言】

『フラナリー・オコナー研究』第3号発刊にあたって

会長 野口 肇

(3)

【論文1】

フラナリー・オコナー～「聖霊の宮」に見られるカトリック的な側面～

野口 肇

(6)

【論文2】

高慢について

～“Everything That Rises Must Converge”(1961) にみるオコナーの人間凝視～

亀田 政則

(19)

会 則

(32)

投稿・執筆規定

(34)

活 動 報 告

(35)

編 集 後 記

(37)

執 筆 者 紹 介

(38)

『フラナリー・オコナー研究』第3号発刊にあたって

日本フラナリー・オコナー協会会長
野口 肇

新型コロナウイルスが国内で確認されてから4年近く（第1例報告：2020年1月16日）経って、ようやく日常生活も戻ってきたようです。何よりのことです。ここで、まず初めに新型コロナウイルス感染下における我が協会の活動について記しておきたいと思います。新型コロナウイルス感染拡大に伴い、2020年3月に予定をしておりました「日本フラナリー・オコナー協会第7回大会」は延期せざるを得ませんでした。しかしながら、協会のホームページでご存じの方も多いかと思いますが、2021年3月にはオンラインで「日本フラナリー・オコナー協会第7回大会」を開催いたしました。続いて、同年8月には、やはりオンラインで「令和3年 夏の読書会」を、さらに、翌2022年3月には同じくオンラインで「日本フラナリー・オコナー協会第8回大会」（読書会）を開催いたしました。以上のオンラインでの大会や読書会の開催に当たり、事務局の方々のご尽力と、会員の皆様のご協力をいただき、感謝しております。お陰様で、それぞれに有意義で充実したものとなりました。そして本年2023年3月には、久しぶりに対面で「日本フラナリー・オコナー協会第9回大会」が中央大学多摩キャンパスで、また同第10回大会が中央大学茗荷谷キャンパスで開催され、それぞれ研究発表と読書会が行われました、内容が有意義なものであったことは勿論のことですが、久しぶりに元気な皆さんとお会いし、お話できたこと、嬉しく思いました。以上、ごく簡単に新型コロナウイルス感染下における、我が協会の活動についてご報告させていただきました。

さて、ご存知のように、2021年2月24日にロシアがウクライナ侵攻を初めて以来、その戦禍に纏わるニュースを見聞きしない日はありません。ところで、オコナーはあるエッセイの中で、「真剣な作家は常に世界全体について書くもので、彼（真剣な作家）にとって、広島の上に落とされた爆弾は、オコニー河あたりの生活にも影響を与えるものであり、このことについて作家はどうすることも出来ない¹」と述べています。ウクライナ戦争は確実に世界の人々の生活に多大な影響を及ぼしています。しかしながら、戦争が齎す影響について作家は何も出来ないと言いながらも、彼女は続いて同じエッセイの中で、「希望のない人は小説を書かない。……小説家が、もし金銭の報酬の希望によって自分を支えているのでないとしたら、（小説家は）魂の救済の希望によって支えられていくしかない、……²」とも述べています。特にこの後半部の「（小説家は）魂の救済の希望によって支えられ

¹ Flannery, O'Connor. "The Nature and Aim of Fiction," *Mystery and Manners*. eds. Fitzgerald, Sally and Robert Fitzgerald. (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979), 77.

² *Ibid.*

ていくしかない」という言葉は、彼女自身への言葉であると同時に、読者をも念頭に置いた言葉としても捉えることが出来ると言えます。この言葉について少し考えてみたいと思います。

オコナーは1950年暮れ、25歳の時に膠原病の一種である紅斑性狼瘡を発症して以来、64年8月に39歳で亡くなるまでの半生を死と対峙しながら生きた。おそらくその経験から、彼女は「どのような場所や状況においても」（「マタイによる福音書」10章16-20節参照）、「何も口実にはいけない、自分が置かれた境遇を口実にはいけない」（「ルカによる福音書」9章59-60節参照）ことを学び、強靱な精神力と信仰を持って不治の病と戦って生きたのではないか。正統的なカトリシズムの立場からカトリックに対して揺るぎのない信仰を持っていた彼女³、人間が「神に造られたもの」（「創世記」1章26-27節、など参照）であること、つまり、命は神から預かったもの、神からの賜物という思いがあり、命を全うし、キリスト教徒としての使命を果たすことを当然のことと考えていたと思われる。つまり、彼女は神が人間を創造する際に（「創世記」1章26-27節参照）、神が「我々にかたどり」、「我々に似せて」造ったこと、そしてその意味が「神人同型ということではなく、神と向き合う存在」ということを理解していた。さらに加えて、作家としての自分の使命を「イエスによる贖い」（「ローマの信徒への手紙」3章24節、「エフェソの信徒への手紙」1章7節、「ヘブライ人への手紙」9章15節、など参照）に擬え、目の前の現実生活の中で直面する種々様々な悩みや病、あるいは罪を抱えて閉塞状況にある読者に対して、乱暴で暴力的な方法であれ、自分の書くものが切掛となって、彼らが少しでも望ましい状態に変われる一助になって欲しいという普遍的な希望を持っていたのではないか。あるいは、先程引いた言葉の一部を援用するなら、彼らの「魂の救済」に資すればいいという希望で、自分を支えていたのではないか。そのために彼女は堅忍不拔の意志を持って、治る見込みのない病氣と闘いながら、死の床にあっても作品を書き続けたと言える。それは自分のためであると同時に、読者のためでもあった。まさに彼女は、「希望のない人は小説を書かない」という言葉を、実践したと言える。因みに上で訳した「魂の救済」に相当する原語はsalvation⁴で、手元の辞典によると、それは「（主にキリスト教で罪業（sin）からの）魂の救済（された状態）⁵」（筆者も訳語はそれに倣った）と、あるいは《神の導きによる、病氣・災害などからの》癒やし、救い⁶と定義されています。このように考えると、彼女はまさに信仰の人であったと言える。

³ オコナーがカトリックに対して揺るぎのない信仰を持っていた例として、彼女が「聖体」について、ある席で「もし聖体が単に象徴みたいなものだと言うのなら、そんなものはくそ食らえだ」（彼女の1999年12月16日付の“A”宛の手紙参照。（Fitzgerald, Sally, ed. *The Habit of Being*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. [pp. 123-126]）と言った言葉がよく引用される。因みに、「聖体」とは、「カトリック教会の用語で聖餐式で聖別されたパンのこと。その形態の中に復活の主キリストが現在すると信じられ、祈りと礼拝の対象とされている」（大貫 隆他編集『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002）、653。

⁴ 大野恵正『創世記』木田敏一監修『新共同訳 旧約聖書解題』（日本基督教団出版局、2001）、27。

⁵ 小西友七編集主幹『ジーニアス英和辞典（改訂版）2色刷』（大塚館書店、1995年4月1日）、1568。

⁶ 松田徳一監修『リーダーズ英和辞典 初版第14刷』（研究社、1992）、1912。

ところで、無意味で悲惨なウクライナ戦争が終わる見通しはありませんが、このような時代状況に生きているからこそ、我々は特定の宗教・宗派に拘わらず、一歩立ち止まって人間の力を超えた超越的な存在と向き合う謙虚さと余裕を持ちたいものです。

さて、この度、約3年振り（前号は2022年9月30日発行）に当協会の機関誌『フラナリー・オコナー研究』第3号が発刊されることになりました。掲載論文は2本ですが、今後、応募者が増えてくれることを願っています。

会員のみなさまのご協力で、本協会をより一層盛り上げていきたいと思います。今後とも、よろしくお願いたします。

2023年10月

フラナリー・オコナー
～「聖霊の宮」に見られるカトリック的な側面～

野口 肇

I

フラナリー・オコナー (Flannery O'Connor, 1925-64) は、「生まれながらのカトリック教徒」(HB114)であり、また「カトリックの作家」(MM177)であった。しかしながら、彼女の作品にカトリックを背景にしたものは多くない。また、「難民」(“The Displaced Person,”1954)、「長引く悪寒」(“The Enduring Chill,”1958)などに見られる神父を除いては、カトリックを信じている登場人物も多くはない。その一方で『賢い血』(Wise Blood,1952)、『烈しく攻むる者はこれを奪う』(The Violent Bear It Away,1960)、『難民』などをはじめ、カトリックを嫌悪したり、あるいは揶揄したり批判する人物が多く登場する。さらには、アメリカ南部の辺境の地や田舎で「自前の宗教」(HB350)をかざし、「魂の救済を熱狂的に叫ぶ預言者や説教師」(MM207 参照)たちも多く見られる。彼らを通して、彼女が生きた 20 世紀前半のアメリカ南部を覆っていた反カトリックという宗教風土もかい間見られる。そんな彼女の作品の中で、この拙論で取り上げる「聖霊の宮」(“A Temple of the Holy Ghost,”1954)は例外とも言える。つまり、作品には彼女が生まれてから 13 年間あまりを暮らしたジョージア州サヴェンナで通っていた、地元のカトリック系の学校にヒントがあったと思われる修道院附属の学校や礼拝堂、あるいは修道女の様子などが書かれ、また、カトリック教会の用語も散見される。しかし、何よりも主人公の女の子が「聖体降福式」¹に出ている最中に回心し、神の臨在を知るといふ、テーマそのものが非常にカトリック的である。拙論では、20 世紀前半のアメリカ南部の宗教風土にも触れながら、特に作品の結末にかけて見られるカトリック的な側面をはじめ、作品に込められたオコナーの思いやメッセージなどを一瞥してみたいと思う。

II

作品の主人公は 12 歳になる女の子で、名前がなく、the child と呼ばれている。拙論では女の子と呼ぶ。彼女は意地悪く、人をばかにし、誰にでも生意気な口を聞き、母親にも口答えをしたりする。ところで、週末にその女の子の家に、またいところで、修道院附属の学校に通っている 14 歳になるスーザン (Susan) とジョアン (Joanne) の二人がやってくる。二人は服のことや化粧、さらには異性に夢中になっている典型的な十代の少女である。その彼女たちは、自分たちが女の子よりも年上なので、自分たちのほうが頭がい

¹ 「ラテン式典礼のカトリック教会において行われる聖体に対する信心業」(浜 寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』,エンデル書店/ヘルデル代理店,平成 8, 394)。

いと見えを張っている。しかし女の子は、そんな彼女たちを数時間観察したあと、彼女たちをまったくの低能と決めつけ、あのばかさ加減が遺伝してなくてよかったと思う。

ところで、スーザンとジョアンを招いた女の子の母親（スーザンとジョアンの母親と、昔、同じ修道院附属学校に通っていた）は、彼女たちの相手をしてくれるのに相応しい同じ年頃の男の子を知らないという。それを聞いて、女の子は近くの農場の手伝いをしている、将来「神の教会」（[プロテスタント] 福音派ペンテスコ派²の教会の一つ）の説教師になりたいと言っている、ウィルキンズ家（the Wilkins）の共に 16 歳になるウエンデル（Wendell）とコリー（Corry）の名前を挙げる。母親はこの提案を受け入れ、二人を夕食に招待し、二人の女の子を市に連れて行ってもらう手筈を整える。

夕食の支度が出来る間、ウエンデルは半ば恋歌、半ば讚美歌のように聞こえるヒルビリー・ソングをうたう。それから彼はスーザンに笑いながら、「犬のように愛らしい目」（CS240）を向けて次の讚美歌をうたう。

「ああわたしにあるともはイエス
このようなおかたはない
主は谷のゆり
主はわたしを放ちたもう！³」

さらに彼は、同じ表情をジョアンに向けてうたう。

「火の壁、わたしを囲むとも
何も怖れるものはなし、
主は谷のゆり、
わたしはいつも主とともにあり！⁴」

ウエンデルが歌ったのは、作品にタイトルはないが“The Lily of the Valley”という讚美歌である（注（3）参照。邦題「われは谷のゆりなり」）。しかし、彼が歌ったこの讚美歌の歌詞を本歌と照らし合わせてみると、彼はこの讚美歌を間違っというより、むしろ

² ペンテスコ派の「各教派は 1950 年代までは南部や西海岸の貧しい白人や黒人に信者が多かったが、現在ではあらゆる地域や階層に見られる」（大下尚一・小田 健・釜田泰介・中村春次・松山信直編『アメリカハンドブック辞典』有斐閣、1989、182）。

³ 作品に引用されている歌詞を引いておく。

*“I've found a friend in Jesus,
He's everything to me,
He's the lily of the valley,
He's the One who's set me free!” (CS240)*

なお訳詞として引いた最初の 2 行は、日本福音連盟聖歌編集委員会『聖歌』（いのちのこぼ社、1991）、547 より引用。タイトルは「ああわたしにある友はイエス」。副題は「われは谷のゆりなり」となっている。続く 2 行は拙訳。

⁴ 作品に引用されている歌詞を引いておく。

*“A wall of fire about me,
I've nothing now to fear,
He's the lily of the valley,
And I'll always have Him near!” (CS240)*

文中のこの連の訳詞は拙訳。

ろでたために歌っていることがわかる。つまり、第一連では初めの2行だけが正しく、残りの2行は本歌とは違い、さらに後半部がない。また、彼が続けて歌う第二連の最初の2行は本歌の第三連にあるが、それも第三連の途中からである。また、続く他の箇所歌詞が他の部分と混ざっていることがわかる。そして、将来「神の教会」の説教師になろうとしているウェンデルと、彼の間違いを直そうともしないコリーが、「神への賛美は信仰行為の最初、最後⁵」と言われる讃美歌を間違える、あるいはでたために改竄して歌うということは、讃美歌の原義を損なっている。しかし説教師になろうとしているウェンデルが、若い男女が相手を求め合う恋愛叙情詩である「雅歌」の次の一節、「わたしはシャロンのばら、野のゆり。おとめたちの中にいるわたしの恋人は／茨の中に咲きいでたゆりの花」(雅 2:1-2)を知ったうえで、故意に「主は谷のゆり／主はわたしを放ちたもう！」という第一連の最後 22 行を歌ったとしたら、そこにはウェンデルの別の意図が見えて興味が引かれる。なぜなら、いま上で引いた「雅歌」の一節は相手を求める若い男の歌で、ウェンデルが二人の女の子に笑いながら「犬のように愛らしい目」を向けてこの2行を歌う裏には、彼の、あわよくば彼女たちを誘惑しようという下心が透けて見えるからである。そうだとすれば、彼は承知の上で讃美歌をでたために歌い、その讃美歌を俗的で粗野なものにしていることがわかる。

続いてウェンデルとコリーは、“The Old Rugged Cross”をうたう。作品にタイトルは書かれているものの、歌詞もなければ、彼らがどのように歌ったのかなどについては書かれていない。邦題は「おかにたてるあられずりの」である。参考のために、注⁶にこの讃美歌の第一連の原語と日本語の歌詞を引いておく。ところで、今から30年以上も前の古い話で恐縮だが、当時テネシー大学教授であったアリソン・R. アンソール (Allison R. Ensor) 氏に「われは谷のゆりなり」と「おかにたてるあられずりの」を含め、オコナーの作品に見られる楽曲についてお伺いする手紙を書き、お返事を頂いたことがある(1990年3月13日付)。前者について、南部では多くのキリスト教徒に好まれ、特に福音派の教会で歌われている讃美歌であること、後者については、やはり南部の多くの教会で歌われていて、二つの讃美歌は南部ではそれなりに知られていると教えていただい

⁵ 日本基督教協議会文書事業部 キリスト教大事典編集委員会『キリスト教大事典改訂新版第二版』(教文館, 昭和48) 458 参照。

⁶ The Old Rugged Cross

On a hill faraway stood an old rugged cross
The emblem of suffering and shame;
And I love that old cross where the dearest and best
For a world of lost sinners was slain,

[Chorus] は省略。

歌詞は Peterson, John W. Com. and ed. *Great Hymns of the Faith* (Grand Rapids, Michigan: Singspiration Music, 1968), 113 より引用。

．．．．． 丘にたてるあられずりの
(「そこにて彼らイエスを十字架につく」)

おかにたてるあられずりのじゅうじかにかかりて
すくいぬしはひとのためにすてませりいのちを
じゅうじにイエスキミ われをあがないたもう
じゅうじかのなやみは わがつみのためなり

[合唱] 省略。

訳詞は日本福音連盟聖歌編集委員会『聖歌』, 338 より引用。

た。オコナーは実際にこれらの讃美歌を聞く機会があったり、あるいは、筆者が大分前にアトランタに滞在していた時に経験したことがあるように、ラジオの宗教番組などを通して聞いたことがあったりしたのである。ところで余談だが、その手紙で、アンソール氏はオコナーの読者の中には、ミレッジヴィル（オコナーが1938年から45年まで暮らした母親の実家のあった、ジョージア州中部の都市＝筆者注）は'hicks'(hillbillies'=筆者注)の住む町ではない、ということも教えていただいた。上でも引いたように、ウェンデルが「われは谷のゆりなり」を歌う前に、半ば恋歌、半ば讃美歌のように聞こえるヒルビリー・ソングを歌っていたという一節があることから、誤解しないようにと教えてくれたのだと思う。

そしてウェンデルが「おかにたてるあられずりの」を歌い終わると、今度は自分たちの番だと言わんばかりに、スーザンとジョアンは修道院仕込みの歌いぶりで、タイトルは書かれていないが“Tantum Ergo”（「タントム・エルゴ⁷」）をうたう。これはカトリックの讃美歌であるが、彼女たちは原語のラテン語でうたう。（注⁸に作品からラテン語の歌詞を引いておいた。次に引くのは、その日本語訳詞の一例である）。

「かくも偉大な秘跡を伏して拝もう。
いにしへの式は過ぎ去り新たな祭式に変わった。
願わくは信仰が五官の不足を補わんことを。
永遠の父と子とに賛美と喜びあれ。
また、栄えと栄誉と力と祝福あれ。
二位から出づる聖霊にも賛美あれかし。
アーメン⁹」

ウェンデルとコリーの二人はこれがカトリックの讃美歌であることや、ラテン語で歌われていたこともわからず（そもそも二人はカトリックの讃美歌や、それをラテン語で聞

⁷ 「聖マス・アクイナスによって作詞された賛歌「パンジェ・リングワ」の最後の2節であって聖体降福式の時に歌うよう長い間規定されていた」（浜 寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』, 466）。

⁸ “Tantum ergo Sacramentum
Veneremur Cernui:
Et antiquum documentum
Novo cedit ritui:”

“Praestet fides supplementum
ensuum defectui.

Genitori, Genitoque
Laus et jubilatio

Salus, honor, virtus quoque...”

“Sit et benedictio:
Procedenti ab utroque

Compar sit laudatio.
Amen.” (CS241)

この讃美歌に決まった英訳はないと言われているが、サリー・フィッツジェラルドの編んだ『フランナリー・オコナー全作品集』（Fitzgerald, Sally, ed. *Flannery O'Connor: Collected Works*. New York: Literary of America, 1988, p.1266.）に一例が載っている。興味のある方は参照されたい。

⁹ 浜寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』, 466.

く機会もなかっただろう), ウェンデルは「それはユダヤ人の歌に違いない」(CS241) と言う。彼らはスーザンとジョアンが第一連を終えた時, 自分たちははらかわれているのではないかと互いに険しい視線を交わし, その後第二連が終わると, 彼らは不快で, また驚いている様子を見せる。その二人の様子を, 女の子はじっと見ている。そして, いま引いたウェンデルの言葉に対してスーザンとジョアンはくすくす笑ったが, ウェンデルの言葉を聞いた女の子は, 「このでぶのばかが!」(Ibid.), 「やーい, うすのろ。神の教会の大ばか者!」(Ibid.) と言う。恐らく女の子の頭の中には, 将来「神の教会」の説教師になろうとしているウェンデルとコリーについて誰かが言っていたという, 「……あの子たち二人とも, 神の教会の説教師になるんだって。説教師になるのに, なんにも知る必要がないんだって」(CS239) という言葉があったのだろう。それ故, この子たちはこんな讚美歌のことも, それがラテン語で歌われたことも, 本当になんにも知らないばかなんだと思って, 二人を罵倒したのだろう。

しかし, スーザンとジョアンが歌った讚美歌に対するウェンデルとコリーの反応は南部の辺境の地の少年たちにとっては, ごく自然なものだったのではないか。なぜなら, 筆者は以前にも書いたことがあるが, アメリカでは植民地時代からプロテスタントによる敵意に満ちた反カトリック感情が強く, カトリックはプロテスタントによる差別や憎悪, 排斥の対象であり, 特に南部においてはカトリックが「外国の教会, アメリカになじまない教会¹⁰⁾」であったからである。つまり, プロテスタントはカトリックを外国の非アメリカ的宗教と考えていた時代である。そういう時代状況の中で, 修道院附属の学校に通っていたスーザンとジョアンが, ウェンデルとコリーの前でラテン語の讚美歌を歌ったというのは, まさにカトリックが何だかわからない「外国の教会, アメリカになじまない教会」と言われても仕方がない理由の一つでもあったのではないか。さらに, スーザンとジョアンが讚美歌をラテン語で歌ったのは, 20世紀前半の, 排他的で「ラテン語と厳しい規律, おびただしい典礼で信徒を縛¹¹⁾」っていたという, アメリカのカトリック教会の様子的一端がかい間見られ, 興味が引かれる。

上で述べたような南部の時代状況や宗教風土の中で, 南部の辺境の地で育ち, 農場の手伝いをしているウェンデルとコリーにとって, 先程も述べたように, カトリックの讚美歌である「タントゥム・エルゴ」を聞く機会があったとは思えない。ましてやそれがラテン語で歌われることを知っていたとも考えにくい。ウェンデルがその讚美歌を聞いて, 「それはユダヤ人の歌に違いない」と言うのは, 当然と言えば当然の反応であるが, 女の子やスーザン, そしてジョアンは, 彼らの無知を笑ったのだ。つまり, 先程引いた女の子の言葉を引用するなら, 彼らを「やーい, うすのろ。神の教会の大ばか者!」と嘲笑したのだ。だがそこには, 当然, 彼女たちなりの偏狭な党派性, 延いては思い上がりや傲慢もあっただろう。同じことが, 女の子が卒業式の時に学校にやって来て説教したバプティスト派の牧師をからかったり, その口調や身振りを何度も真似したり, あるいは自

¹⁰ Rubin, Louis D. Jr. "Flannery O'Connor and the Bible Belt." *The Added Dimension: The Art and Mind of Flannery O'Connor*. eds. Friedman, Melvin J. and Lewis A. Lawson. (New York: Fordham University Press, 1977), 50.

また参考までに一例を挙げると, 木鎌安雄はカトリックに対して「移民の教会」(『カトリックとアメリカ』, 南窓社, 1996, 3), あるいは「外国の教会, アメリカになじまない教会」という言葉を使っている『アメリカのカトリック——人と霊性——』, 聖母の騎士社, 2004, 6)。

¹¹ J. M. キタガワ著 曾野鈴子・宮本要太朗訳「移民の宗教」井門富二夫編『多元社会の宗教集団——アメリカの宗教・第2巻——』(大明堂, 平成4), 21.

分が「神の教会」に入っていないくてよかったと神に感謝したりすることについても言える。つまり、彼女のこれらの行為や思いは、バプティスト派の牧師よりも自分の属しているカトリック教会の神父の方が、また「神の教会」よりもカトリック教会の方が上だという思い上がりや傲慢から来ているからである。しかし、オコナーが特に女の子やスーザン、そしてジョアンを通して、単に当時の時代状況や宗教風土を反映して、彼女たちのプロテスタントへの反発や批判、嫌悪感を書いたとは思われない。そこには何かしら、彼女が伝えたいメッセージがあったのではないか。そのことについては、後で触れる。

III

ウェンデル、コリー、そしてスーザンとジョアンの4人は、その日の夕食後、市に出掛ける。女の子は夜中近くに帰ってきたスーザンとジョアンに、そこで何を見てきたのかを聞きたくて仕方がない。やがて二人は女の子に自分たちが見てきた、テントの中の舞台を動き回る男女両性具有の奇形人間のことを話す。しかし女の子は何のことかわからず、「その人に頭が二つあったということ？」(CS245)と聞くと、スーザンが「それは男と女で、ドレスの裾を上げて、そこを見せたの」(Ibid.)と言う。やがて女の子は自分のベッドに戻ると、半分眠りながら、奇形人間が舞台を左右に移動する様子を想像しようとするが、眠くて出来なかった。その代わりに想像したのは、奇形人間を見物しに来ていた近隣の人たちの顔であった。男たちの顔は礼拝の時よりも厳粛で、女たちは真面目で好奇心一杯であった。さらに、女の子は奇形人間と彼らとのやり取りを、うとうとした眠りの中で聞く。その中で、奇形人間は見物人に対して、何度となく「……あなた方は聖霊の宮である、そのことを知らないのか？ そのことを知らないのか？」(CS246)、「聖霊の宮は聖なるものである」(Ibid.)と言う。そして奇形人間が何か言うたびに、見物人は「アーメン」と応える。

いま引いた一節からもわかるように、奇形人間は「聖霊の宮¹²」(一コリ 6:19 参照)という言葉を何度か使う。この言葉は、その日、女の子の母親がスーザンとジョアンになぜあなたたちは互いに「一の宮」(CS238)、「二の宮」(Ibid.)と呼んでいるのかと聞いたところ、彼女たちは修道女が、もし車の後部座席で若者が紳士にあるまじき行為をしたら、「やめてください！ 私は聖霊の宮です！」(Ibid.)と答えなさいと、言ったからだという。それに対して母親は、「あなたがたは本当に——聖霊の宮ですよ」(傍点部は原文大文字)(Ibid.)と答える。その言葉を女の子は気に入る、「誰かに贈り物を貰ったような気がする」。そして上で述べたような、カトリック教会の祈りの一形態である「連禱

¹² 作品のタイトルも含めて、本論で「聖霊の宮」と訳した言葉は原文では a (A)temple of the Holy Ghost'(CS236, 238, 246) で、この言葉 (the temple of the Holy Ghost) は *The Holy Bible Authorized Version* (London, Oxford University Press. 発行年は記載されていない) の 1 Corinthians 6:19. に見られる。

作品には他にも (A) the temple of God'(CS246), God's temple'(Ibid.) などが用いられている。これらは使用した日本語の聖書では「神の神殿」と訳されている。なお、「《神の神殿》はただ祭司のみが入ることのできる至聖所で、その中に神の霊が内在している」と信じられていた」(松永晋一「コリントの信徒への手紙一」山内 眞監修『新共同訳 新約聖書略解』(日本基督教団出版局, 2000, 478 参照)。

また、「神殿」は「宮」と呼ばれていることもある(マタ 12:16, 21:12, など参照)。

¹³」を思い起こさせる奇形人間と男女の見物人との間でのやりとりを、うとうとした眠りの中で聞く。やがて女の子の気持ちは高揚し、自分の傲慢さを自覚し、今までの自分の意地の悪さや、誰にでも口答えしてきたこと、さらには自身の生活を悔い改める切掛を得るのである。つまり、彼女は自分が「聖霊の宮」であることを、そして自分の内に「神の霊」（一コリ 3:16, 6:19, など参照）が住んでいることを自覚する。このように考えると、彼女が想像した奇形人間がいる場所がテントだったというのは、興味深い。なぜなら、このテントは「…わたしは彼らの中に住むであろう」（出 25:8）と、あるいは「わたしはその場所で、あなたたちと会い」（出 29:42 参照）と聖書にあるように、「神が民の間にいることを示す¹⁴」、または「神が臨在する場所¹⁵」と言われている幕屋の役割を果たしている、と考えられるからである。作品中のテントは、女の子と神との出会いの橋渡し、つまり仲保者の役割を果たしていると言える。蛇足ながら、作品の最後で仄めかされているように、そのテントは移動式であるが、聖書に書かれている幕屋も移動式（出 25, 民 9:15, 使 7:44, 黙 15:5, など参照）であった。

IV

翌日の午後、女の子と母親はアロンゾー・マイヤーズ（Alonzo Myers）の運転するタクシーでスーザンとジョアンを修道院まで送って行く。女の子と母親がこの修道院に着いてから作品の結末にかけて、特にカトリック的象徴や要素が多く見られると同時に、神の恩寵（＝恩恵とも言う）の働きが暗示されている場面があるのに気がつく。それらのいくつかを、見てみよう。

女の子と母親が修道院に着くと、入り口で、ある修道女が女の子の母親を抱きしめてキスをする。一方、女の子は手を差し出すが、冷やかな表情を浮かべ、修道女の靴の向こうの羽目板に目をやる。そうしないと、母親にしたことと同じことを、修道女が自分にもするだろうと思ったからだ。女の子の意地の悪さが窺える場面である。その後、彼女たちは修道女に聖体降福式に出るように言われる。そして礼拝堂に入ると、女の子は母親と修道女の間で跪き、全員で神を賛美する「タントウム・エルゴ」を唱える。この時の彼女の姿は、祈りを捧げている姿にも見える。そしてその時、彼女は自分の意地悪い思いが消え、自分が神の前にいることを感じ、機械的に、意地悪くならないように、生意気な口を聞かないように、今のような話し方をしないようにと祈る。つまり、ありのままの自分を見るようになる。彼女の傲慢さが消えるのである。彼女に思わぬ自己認識への道を用意した彼女のこの祈りは、カトリックで言う告解の秘跡を思い起こさせ、興味深い。なお「罪の告白の習慣は、今でもカトリック教会で秘跡として実践されている¹⁶」という。

¹³ 「先唱者が一連の嘆願を一つずつ唱えることに、全員が同一の反復句で答える形式の祈願」（大貫 隆他編集『岩波キリスト教辞典』、岩波書店、2002）、1059。

¹⁴ 浜寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』、825。

¹⁵ 大貫隆他編集『岩波キリスト教辞典』1059。

¹⁶ *Ibid.*, 397。

そのうちに、女の子は「心が静まり、やがて空っぽになり」（CS248-49 参照）、司祭が「聖体¹⁷」の入った「聖体顕示台¹⁸」を掲げると、奇形人間がいた市のテントのことを思い浮かべる。奇形人間は、「私はとやかく言う気持ちはありません。神様が私にこのようになりなさいと、望んだのです」（CS248）と saying していた。この声は「新約聖書」の福音書の中で、イエスが弟子や不特定多数の聴衆に向かって話した譬話などの最後に言う、「聞く耳のある者は聞きなさい」（マタ 11:15, 13:45, マコ 4:9, 23, ルカ 14:35, など参照）という言葉の思い起こさせる。そして女の子は奇形人間のその言葉に答えるように祈り、「空っぽ」になって自分を見つめ直す機会を得る。

話は少し逸れるが、いまだで引いた、女の子の「心が静まり、やがて空っぽになり」という描写は注目してもいい。なぜなら、オコナーが「20 世紀の女性の中で最も関心を抱いていた一人」（HB93 参照）、フランスの哲学者シモーヌ・ヴェーユ（Simone Weil, 1909-43）の「恩寵はあいているところを満たす。ただし、恩寵を受け入れる真空のところにしか入っていかない。そしてその真空をつくるのは恩寵である¹⁹」という言葉の思い出させるからである。つまり、女の子の心が「空っぽ」になるということは、ヴェーユの言う「真空」状態になるということと同じと考えてもいい。そしてまさにその瞬間、女の子は初めて神の臨在を知り、恩寵で満たされることが暗示されている。

ところで、女の子は帰り際、修道院の玄関で修道女に抱き寄せられ、その黒い修道服に包まれ息が苦しくなる。その時、修道女がベルトに挟んでいた十字架像が女の子の頬に押しつけられる。ここで注意することがある。それは先程も述べたように、女の子は修道院の入り口で修道女に抱かれてキスされることを拒否する態度を取ったが、帰り際には修道女のされるがままになる、ということだ。このことは彼女が今までの生き方を反省し、祈り、そして教会の教えを受け入れたことを意味している。カトリックにおいて救いはミサなどの祭儀や礼典によると言われているが、まさに聖体降福式に出席後の彼女のこの変化はカトリック的と言える。そして修道女が玄関で女の子を抱き寄せると、修道女がベルトに挟んでいた十字架像が女の子の頬に押しつけられ、痛く感じる。この十字架像は、人知を以て知ることが出来ない神の愛という神秘の表象であり、彼女が十字架像を頬に押しつけられた時に感じた痛みは、彼女の今までの生き方に対する神の赦しを示すものである。カトリック的に言えば、その痛みは秘跡を授与する司祭の役割を演じていると言える。

¹⁷ 「カトリック教会の用語で聖餐式で聖別されたパンのこと。その形態の中に復活の主キリストが現在すると信じられ、祈りと礼拝の対象とされている」（*Ibid.*, 653）。

因みに、「聖体」というのは、カトリック教会の七つの「秘跡」（カトリック教会が sacrament に対して用いている訳語。プロテスタントは「聖」礼典という。）の一つである（七つの秘跡とは洗礼・聖信・聖体・告解・終油 [現・病者の塗油]・叙階・婚姻である）。本文でも引いたが、オコナーは「秘跡が神の恩寵を与える——それだけです」（HB 71 参照）と述べている。

さらに、オコナーは聖体について、彼女はある話し合いの場で激しく声を震わせながら、「もし聖体が単に象徴したいなものだと言うのなら、そんなものはくそ食らえだ」（オコナーの 1955 年 12 月 16 日付の“A”宛の手紙 [HB 123-126]）と言って擁護したと述べている。この言葉は有名なのでよく引用される。例えばロバート・フィッツジェラルド（Fitzgerald, Robert. “Introduction.” *Everything That Rises Must Converge*. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1965. p.xiii 参照）や、サラ・ゴードン（Gordon, Sarah. *A Literary Guide to Flannery O'Connor's Georgia*. Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 2008. 99 参照）にもみられ、そこでゴードンは「この言葉はオコナーの信仰の強さを思い出させるものである」と述べている。

さらにある手紙では、オコナーが「私たちが聖体に養われている」（HB90 参照）と述べている言葉もある。これらの聖体への信心の言葉に、心からカトリックを信仰し、また擁護している彼女の姿が窺われる。

¹⁸ 「顕示台は聖体を顕示するとき、または聖体行列で奉持するときに聖体を納める聖器具であることから、聖体の象徴として使われる」（浜 寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』, 394）。

¹⁹ 渡辺義愛訳 橋本一明・渡辺一民（編者）シモーヌ・ヴェーユ著『重力と恩寵』シモーヌ・ヴェーユ著作集 3（春秋社, 1998）, 60.

やがて、アロンゾーの運転するタクシーで母親と帰る途中、女の子は車の中から窓の外を見る。作品の最後であるが、その部分を見てみよう。

……女の子は顔を窓の方に向け、緑の色を深めながら起伏している一面に広がる牧草地が、暗い森に続いているのを見た。夕陽は血にまみれて持ち上げられた聖体のように大きく、赤い球のように見えた。夕陽が沈んで見えなくなると、空には赤い粘土の道のような一条の線が、木々の上に残っていた。(CS248)

この部分にも、短いながらカトリック的象徴や要素に溢れている。まず、この前半部分に見られる色について見てみよう。最初に見られる「緑」は、カトリック教会のミサの典礼色では「生命の成長や希望²⁰」を、またすぐその後に見られる「赤」は、やはり典礼色で「……神の無限の愛を象徴する色²¹」であり、典礼学では「聖霊²²」を表象する色である。さらに、「赤」には人類の罪の身代わりとなって十字架に架けられたイエスが流す血、すなわちイエスの罪の償いの象徴(マコ 14:24, 一コリ 10:16, など参照)でもある。女の子が、いま挙げた「生命の成長や希望」を表す「緑」が「暗い森に続いている」のを見たり、典礼色で神の愛を象徴する「赤」を空に見ることによって、彼女が愛に満ちた神の無限の祝福を受け、彼女の将来が明るいものになることが、象徴的に書かれていると言える。

次に、上で引いた部分に見られる、「夕陽が持ち上げられた聖体のように」と書かれている箇所注目してみよう。このことから、我々は司祭によって掲げられた「聖体顕示台」に入っている「聖体」を思い浮かべる。そして注意しなければならないことは、「夕陽」が「聖体のように大きく、赤い球のように見えた」と書かれていることだ。つまり夕陽(太陽)とキリストが同一視されていることだ。初期キリスト教の時代から太陽はキリスト、あるいは救世主と同一視されている(マラ 3:20, 黙 22:16, など参照)が、オコナーも彼女の作品にしばしば登場する太陽のイメージについて、ある時、ある学生の質問に答えて、「太陽は、太古の昔から神である²³」と答えている。彼女の言う神は、キリストのことと考えていいと思う。さらにこの箇所には、「完璧/永遠²⁴」を意味する「球」が見られるが、夕陽を大きく赤い「球」のように書くことで、オコナーは神の完璧さ、永遠性を書き、さらに夕陽に靈性を与えている。

女の子と母親がスーザンとジョアンを修道院まで送ってから、作品の結末にかけて見られる、いくつかのカトリック的象徴や要素を見てきたが、それらに加え、上で引いた自然描写を見逃すわけにはいかない。そこに見られる夕陽で赤く染まった広い空は、卑小な人間、つまり女の子を包み込むのには十分過ぎるほど赤く広い。と同時に、この最後の自然描写は、人間を包み込む神の愛の存在の大きさを書いて、象徴的である。女の子が神の恩寵を授けられたことを暗示している。そしてそのことを支えているのが、夕日が沈

²⁰ 大貫 隆他編集『岩波キリスト教辞典』, 790.

²¹ マンフレート・ルルカー著 池田紘一訳『聖書象徴辞典』(人文書院, 1998), 2.

²² *Ibid.*

²³ Feeley, Kathleen, S.S.N.D. *Flannery O'Connor: Voice of the Peacock* (New York: Fordham University Press, 1982) .p.41 参照。

ここで引用した言葉は、ある雑誌に掲載されたインタビューの中でオコナーの言葉を、フィーリーが転載したものである。

²⁴ 山下主一郎訳者代表『イメージ・シンボル事典』(大修館書店, 1984), 44 参照。

んだ後、空に残った「赤い [粘土の道のような] 一条の線」である。これはオコナーが1955年8月9日付の“A”宛の手紙 (HB 93-94) で述べているように、トマス・アクィナス (St Thomas Aquinas, c.1225-74) が述べている「恩寵の光²⁵」(傍点部は原文斜体) を思わせて、興味が引かれる。ラテン語で書かれたアクィナスの『神学大全』(Summa Theologiae, 1267-73) で、この「恩寵の光」に対応する英語の訳語は、使用した版(注(24)参照)によると the light of grace である。さらに grace に関して付け加えるならば、「トマス神学の中心概念は「めぐみ」である²⁶」と言われ、「めぐみ」に該当する英語は grace で、この語には「恩恵、無償の贈り物²⁷」という意味の他に、「恩寵」の意もある。まさに「赤い [粘土の道のような] 一条の線」は、女の子に対する神の恩寵の徴であり、無償の贈り物を表している。ここで先程も引いた、女の子の母親がスーザンとジョアンに「あなたがたは本当に聖霊の宮ですよ」と言う言葉を思い起こしてみよう。女の子は母親のその言葉が気に入り、「誰かに贈り物を貰ったような気がする」が、作品の最後になって、この言葉の意味がはっきりする。

ところで、神の存在、あるいは恩寵を書くために自然を持ち出すのはキリスト教の伝統と言われている。オコナーも「カトリック小説では、恩寵は自然を通して働く」(MM 197 参照) と述べている。因みに、オコナーは自然界を「神の力のしるし²⁸」と見ているという、ドロシー・タック・マックファーランド (Dorothy Tuck McFarland) の指摘もある。いずれにしても上で引いた作品の最後の部分は、自然を通して恩寵の働きを書いた例である。このように考えると、「恩寵は自然を破壊させるのではなく、完成させる²⁹」という、アクィナスの言葉が思い出される。そして上で引いた最後の部分の自然描写は、紛れもなくカトリック的ヴィジョンと言える。オコナーは女の子が車の窓から見たものを、読者にも見せようとした。そのために明確な視覚的イメージを用い、その裏に隠された意図を読者に考えて欲しいと願ったと言える。それは人間の理解を超えているかも知れないが、それ故、見えるものを通じて見えないものに思いを馳せて欲しい、と願ったのである。

女の子が神の恩寵を授かる切っ掛けとなったのは、彼女が聖体降福式の時に跪き、意地悪くならないように、生意気な口を聞かないように、今のような話し方をしないようにと祈る、告解の秘跡にも似た行為である。そしてそれは、オコナーの作品によく見られる「作品中の他のどんな行為とも違ったある行為、ある身振り」(MM 111 参照) で、重要な意味を持っている。なぜなら女の子のそれらの行為や身振りは、感覚では捉えられない「恩寵の到来」(MM 112) に対して見せる行為であり、何らかの意味で「神秘と接触する」(MM 111) ものだからである。まさに、オコナーがある手紙で、「秘跡が神の恩寵を与える——それだけです」(HB 71 参照) という言葉が思い出される。

²⁵ Aquinas, St Thomas. *Summa Theologiae*. [英語対訳付] (London: Blackfriars and Eyre & Spottiswoode. 1964.), I, q. 13, a. 5. なお、使用したテキスト箇所に関する略号は慣例に従った。小著で使用したのは以下のとおりである。

I = (第一部), q. = question (問題), a. = article (項)。例: I, q. 1, a. は第一部第一問題第一項を意味する。(同書からの引用は慣例に従って書名を省く。)

因みに、オコナーはアクィナスに強い共感を覚え(例えば、HB 125 参照)、その神学的影響を少なからず受けている。

²⁶ 小田垣雅也『キリスト教の歴史』講談社学術文庫 [1178] (講談社, 2000) 106.

²⁷ 浜 寛五郎訳 A・ジンマーマン監修『現代カトリック事典』, 82.

²⁸ McFarland, Dorothy Tuck. *Flannery O'Connor* (New York: Frederick Ungar Publishing Co., 1976), 115.

²⁹ I, q. 1, a. 8, ad 2. 引用箇所のラテン語の英訳は、'Grace does not destroy nature but brings on to perfection.'

オコナーは「書くことの難しさの一つに、恩寵が何であるかわからない、あるいは、それを見ても気がつかない読者に書くことだ」(HB 190 参照)と述べている。それは言い換えれば、神と人間の出会いを書くことの難しさと言える。彼女は「神は死んだ」(MM 92 参照)と思っている、あるいは「恩寵の到来を見る鋭さ」(MM 112 参照)を失っている自分の読者に、さらには神の「絶対なるもの」を忘れ、「主人公は自分だ」と思い上がり、際限なく傲慢になっていく現代人の多くの読者に、「恩寵の到来」に気づいて欲しい、神と出会って欲しいと願っていた。勿論、彼女が念頭に置いていた読者は、特定の宗教・宗派、また特定の大人や子供ではなかった。主人公の女の子に固有の名前がないのも、その理由からであろう。

V

ところで、オコナーが特に女の子やスーザン、そしてジョアンを通して、単に彼女たちのプロテスタントへの反発や批判、嫌悪感を書いたとは思われない、と前に書いた。そして、そこには何か彼女が伝えたいメッセージがあったのではないかと、とも述べた。論を閉じる前に、そのことについて触れておきたい。

「20 世紀の前半を通じてアメリカ南部、特に辺境の地では反カトリックが猛威をふるって³⁰」おり、作品では具体的に書かれてはいないものの、現実には秘密結社などが作られたりして、カトリックに対する嫌悪感や差別はかなりのものであった。しかしその一方で、20 世紀初めにプロテスタントを中心にキリスト教超教派による歩み寄りを目指す「エキュメニズム運動」(世界教会一致運動)が起こった。カトリック教会も 1920 年頃からこの運動を推し進め、さらに「第 2 バチカン公会議」(1962-65)以後この運動を積極的に推進していった。とは言うものの、南部の辺境の地では、教義や教会制度で他の諸教会を異端視し続けてきたカトリック教会に対して、反カトリック感情は強かった。そして、この「エキュメニズム運動」に賛成していたオコナーは、「私は宗派としての宗派には興味がない³¹」と述べているように、彼女にとってキリストにあってひとつであるとの信仰に立てば、カトリックであろうとプロテスタントであろうと関係ないことだった。初めにも引用したように、彼女自身「生まれながらのカトリック教徒」であり、また「……、今まで教会を離れたこともなく、離れたと思ったことさえありません」(HB 114)と述べているが、カトリックを声高に擁護したり、逆にプロテスタントを激しく非難したりはしなかった。ここに彼女の「キリストを神と信じ、同時に世界を愛しむ」(HB 90 参照)、「近代的意識を持った、カトリック教徒」(Ibid.)の姿が窺われる。「反カトリックが猛威をふるって」いた南部を背景に、自分の信じる宗教を、あるいは宗派を絶対的なものとし、それ以外を異質なものとして異端視したり、排除したり批判したり、嘲笑したりすることは愚かなことだということを、プロテスタントにもカトリックにも伝えようとしたのではないかと。「もし私がカトリックでなかったなら、(作品を)書く理由

³⁰ Gordon, Sarah. *A Literary Guide to Flannery O'Connor's Georgia*. (Athens, Georgia: The University of Georgia Press, 2008.), 96 参照。

³¹ Hicks, Granville. "A Writer at Home with Her Heritage." *The Saturday Review*. (New York: The Saturday Review Inc., May 12, 1962.), 22.

も、(物事を)見る理由も、何か恐ろしいことを感じたり、何かを楽しんだりする理由もなかっただろう」(HB114)と述べる彼女だからこそ、発し得たメッセージとも言える。

VI

発表されてから8年も経過した1962年8月4日付の“A”宛の手紙(HB 487参照)で、オコナーは「『聖霊の宮』は変ですね、誰も注意しないの。選集にも入らないし、誰も批評しないの」と書いている。この言葉から推測すると、彼女は彼女なりに期するところがあつたのではないかと思われる。しかしながら、良くて悪くても作品があまり注目を浴びなかったことは事実のようである。その理由の一つに、南部ばかりではなく、カトリックが「……社会的に認知され、中産階級の構成員となるのは第二次世界大戦後である³²⁾」と言われるように、当時のアメリカ全体を覆っていた反カトリシズムの影響もあつたのではないか。アメリカでの反カトリック感情は、少なくとも20世紀になってからも長く続くのである。このような時代状況のもと、作品のタイトルから、作品がカトリック教会の伝統や権威、あるいは教義などについての宣伝か何かと受け取られ、その結果、作品が避けられたのではないか。勿論、これは筆者の勝手な推測に過ぎない。

ところで、オコナーは「聖グレゴリオスは、聖書は一つの事実を描写するたびに、神秘を明らかにする、と書いた」(MM184)と言い、続いて、「聖書より低い次元ではあるが、このことを小説家は行いたいと思う」(Ibid.)、と述べている。「カトリックの作家」として、彼女が聖書にも似た神秘を明らかにする小説を書きたいと願うのは、至極当然のことである。「神秘は現代人にとって、非常に当惑するもの」(MM124)と彼女は思っていたが、この作品で女の子の告解の秘跡を思い起こさせる祈りを通して、敢えて現代人が当惑する神秘を明らかにしようとしたとも言える。

1950年12月に、後年オコナーの命を奪う紅斑性狼瘡の最初の兆候が現れ、それ以後64年8月に亡くなるまで、彼女は長い闘病生活を続けることになる。しかし、彼女は病を得てから死の直前まで、休むことなく書き続けて生涯を終えた。彼女にとって書くことは、取りも直さず、神秘を明らかにする行為であった。また、奇形人間の無条件で神の意志を受け入れる姿勢、あるいは彼の運命を甘受する姿は、教会とキリストを堅く信じ、かつ全幅の信頼を置いていた彼女自身と重なる。それはまた、カトリック教徒として自分も奇形人間のように生きていくという、彼女の強いメッセージでもあり、ある意味で彼女の信仰告白とも言える。

³²⁾ 亀井俊介編『アメリカ文化事典』(研究社,1999),108.

引用文献略語

- ・本論文で使用したオコナーのテキストと略語。本文中での作品の出典は、引用のあとに括弧内に略語、及び頁数を記す。

[短編集]

The Complete Stories of Flannery O'Connor. 1971. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1981. (CS)

[その他の著作]

Mystery and Manners. 1969. eds. Fitzgerald, Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1979. (MM)

The Habit of Being. 1979. ed. Fitzgerald, Sally. New York: Farrar, Straus and Giroux. (HB)

- ・本論文で使用した聖書各巻の書名の略語表。なお、聖書は『聖書 新共同訳 旧約聖書続編つき』（日本聖書協会、2000）による。

[旧約聖書書名と略語]

出エジプト記 (出)

民数記 (民)

雅歌 (雅)

[新約聖書書名と略語]

マタイによる福音書 (マタ)

マルコによる福音書 (マコ)

ルカによる福音書 (ルカ)

使徒言行録 (使)

コリントの信徒への手紙一 (一コリ)

コロサイの信徒への手紙 (コロ)

ヨハネの黙示録 (黙)

- ・本文中での聖書の書名は、引用のあとに括弧内に略語を記し、次いで最初の算用数字は章を、二番目の算用数字は節を表す。(創1)は「創世記」1章を、(創1:1)は「創世記」1章1節を表す。(—)は、いくつかの章、または節を表す。(創1-2)は「創世記」2章から2章まで、(創1:1-2)は「創世記」1章1節から2節までを表す。また、複数の聖書の書名を表す場合、(,)で区切って併記した。例えば (創1:1, 出1:1)は「創世記」1章1節、「出エジプト記」1章1節を表す。

- ・聖書からの引用に当たっては、読み仮名をすべて省いた。

高慢について

～*Everything That Rises Must Converge* (1961) にみるオコナーの人間凝視～

亀田政則

1.0 探求：何を問うのか

オコナーの人間凝視は苛烈である。彼女の作品群は人間の真相を、すなわち人間自体が「問題性」を孕み、そのゆえに「問われる存在」であることを暴き出す。ここでは、オコナー晩年の作品 *Everything That Rises Must Converge* (1961)¹ を手懸かりとして、人間に巣喰う「高慢²」の様相を明らめ、この作品世界が開示する意義を探求する。この手続きは、「あらゆることをカトリックの伝承に根ざすキリスト教信仰の立場から見る」と明言する「オコナーの眼差し」の追跡でもある。

2.0 作家オコナーの人間凝視：その理拠とは

オコナーの人間凝視の理拠を確認するうえで、*The Habit of Being* (1988) と *Mystery and Manners* (1970) にある記述はとりわけ重要である。

- (a) I feel that if I were not a Catholic, I would have no reason to write, no reason to see, no reason ever to feel horrifies or even to enjoy anything. I am a born Catholic, went to Catholic schools in my early years, and have never left or wanted to leave the Church.³
- (b) I am no disbeliever in spiritual purpose and no vague believer. I see from the standpoint of Christian orthodoxy. This means that for me the meaning of life is central in our Redemption by Christ and what I see in the world I see in its relation to that.⁴
- (c) The universe of the Catholic fiction writer is one that is founded on the theological truths of the Faith, but particularly on three of them, which are basic – the Fall, the Redemption, and the Judgment. These are doctrines that the modern secular world does not believe in.⁵
- (d) The Catholic writer, insofar as he has the mind of the Church, will feel life from the standpoint of the central Christian mystery: that it has, for all its horror, been found by God to be worthy dying for. But this should enlarge, not narrow, his field of vision.⁶

¹ *ETRMC* (1961) と略記。

² この論考では、日本語の「高慢」—「傲慢」とも訳出できる—に対応する語としてラテン語の “superbia” (Ant. humilitas) を念頭に置いている。*ETRMC* (1961)のなかで見られる人間の「高慢」は、英語の *pride* という語では包括できない概念的広がりを持つからである。*Oxford Latin Dictionary*. Ed. P.G. W. Clare. Oxford: Clarendon Pr. 1997; *An Elementary Latin Dictionary*. Ed. Charlton T. Lewis. Oxford: Oxford UP, 1999. および *OED* (2009^{2nd} ed. on CD-ROM, v. 4.0) に基づく “superbia” の辞書的定義には (1) a feeling of pleasure or satisfaction that you have done something well or won something that other people admire. (2) The feeling or respect you have for yourself (honorable pride). (3) The feeling that you are better or more important than other people (arrogance, conceit, vanity, rudeness, discourtesy) などが包摂される。高慢な人間は、不合理にして極端な自負心を抱き、人間としてあるべき節度、自制、均衡を失い、他者に対して「愛なき言動」に走る。高慢は、—たとえばパウロが「コリント 13: 4-5」で、*ἡ ἀγάπη οὐ περιεργεύεται, οὐ φθορίζεται, οὐκ ἀσχημονεῖ...* (*UBSNT*) (2007) 「愛は者らず、専大・高慢にならず、・・・無礼をせず、・・・」と述べているように— 神学的徳 (theological virtue) としての愛 (caritas) に対峙するというみで、悪徳 (vitium) と見なされる。人間誰もが容易に陥り易い悪徳である。

³ *HB* (1988), 114. 亀田 (2020), 17-8, 4.0.

⁴ *MM* (1970), 32. 須山 (2002) では、「私は精神的な目的を信じない者ではない、また漠然と信じる者でもない、私は正統的キリスト教信仰の立場から物を見る。私にとっては人生の意味はキリストによる私たちの救済に中心を持ち、私は世界のなかでものごとを見るとき、このこととの関連において見る」(248)とある。しかしながら、(1) カトリックの神学用語としての *spiritual* (A) および *Redemption* (N) は、それぞれ「霊的な」「贖罪」とするのが妥当である。さらに (2) *What-clause* “what I see in the world” における *what* (Pron) がものごとの全体を指示しており、“whatever I see in the world” と同義である。これらのことを考慮すると、以下のような訳語が可能となる：「私は霊的な目的を疑う者ではないし、漠然と信じる者でもない、私は正統的キリスト教信仰の立場からものごとを見る。つまり、私にとって、人生の意味はキリストによる贖罪の中核にあり、私がこの世界で見るどんなことも、そのこととの関連においてなのである。」

⁵ *MM* (1970), 185.

⁶ *MM* (1970), 146.

オコナーは幼い頃からカトリックのキリスト教的パイディアのなかで生まれ、生涯に亘って「カトリックの信仰」の堅固なる弁護者であった。7 彼女は、(a)~(c) の記述から判明するように、「カトリックの信仰」に根ざして、とくに「キリストによる贖罪と救済⁸」との関連において、混沌としたこの「世界」とそこにうごめく「人間」を見つめ、9 自らが「生きる意味」を確認していたと思われる。そのような彼女にとって、「作家であること」の理拠もまた「カトリックの信仰」にあったとするに矛盾はない。カトリックの信仰に根ざして「書くこと」は、「生きるよすが」であった。

では、カトリックの信仰という理拠にしたがって *ETRMC* (1961) を読み進めると、その作品世界からはどのような人間の問題性、とりわけて人間に巢喰う「高慢」——それは人間の「悲惨さ」に見合う¹⁰ ——の様相が浮かび上がってくるのだろうか？

3.0 意味論的ノン・センス (semantic nonsense): 作品世界の基軸を構成するミセス・ゴッドハイ (Mrs. Godhigh¹¹) と息子ジュリアン (Julian) の会話が意味するもの

医者から、高血圧なので減量するようにと告げられたミセス・ゴッドハイ。その母親を YWCA の減量エクササイズ¹²に連れて行く息子ジュリアンとの会話は、ベケット (Samuel Becket, 1906-89) が *The Unnamable*¹³ のなかで展開した世界ほどラディカルではないもの —— そこでは言葉が カオス 言葉を否定し合い、訪れ来るのは混沌。なにかがなされるとすれば、尽きるところ「しゃべり立てるだけ」の音声行為(phonetic act)¹⁴である。言葉は発される。しかし何かが「言われている」わけではない —— 意味論的ノン・センスに満ちている。

[1] *Mrs. Godhigh*: If you know who you are, you can go anywhere. Most of them in it are not our kind of people, ...I can be gracious to anybody. I know who I am. ¹⁵

Julian: They don't give a damn for your graciousness. Knowing who you are is good for one generation only. You haven't the foggiest idea where you stand now and who you are...¹⁶

[2] *Mrs. Godhigh*: I most certainly do know who I am. ...If you don't know who you are, I'm ashamed of you. ¹⁷

Julian: Oh hell.¹⁸

...

Julian: Nobody in the damn bus cares who you are. ¹⁹

⁷ *HB*(1988), 124-5.のなかで言及されている Mrs. Broadwater との Eucharistia (聖体の秘跡) についての会話はこのことを物語る。Mrs. Broadwater が「子供の頃とは違って、今ではそれがひとつのシンボルだと考えている」と言ったことに対して、カトリックの立場からこの秘跡の意義——パンと葡萄酒の形相の下にキリストの体が真に現存する (S. T (1980), III, q. 74, a. 4, resp: "in hoc sacramento sit verum corpus Christiti.") ——を擁護するオコナーは、怒りに震える声で、"Well, if it's a symbol, to hell with it." と応答したと述べている。とはいえ、このことはオコナーが頑迷固陋な人間であったことを意味するものではない。*MM*(1970) と *HB*(1980)にある記述からも判明するように、彼女は哲学や神学の新潮潮にも敏感であった。カトリック教会の「禁書リスト」にも挙げられていたティヤール・ド・シャルダン (Teilhard de Chaldin, 1881-1955)の著作もまた然りである。

⁸ キリストによる贖罪の問題は、*The Displaced Person* (1954)においても見い出される (亀田 (2020): 16)。

⁹ たとえば、A と B の前に一個のリンゴがあるとしよう。A はそのリンゴを物世界におけるパラクリンゴ属に属する美味しい果物と見る。一方、キリスト教信仰者の B は A の視点の踏まえつつ、リンゴを神からの賜物、大地の恵み、人間の手の業の実りと見る。すなわち、ある対象に対する観点が異なると対象の意味が異なってくるように、B は A が言ういみでのリンゴの実在を認めつつも、そのリンゴを見て取る観点が A とは異なる。A と B は、みだん彼 (女) らが「現実」と呼び起こすに積み重ねられている世界に共に在りながらも、「異なった意味世界」のなかで生き、そこからものごとを見ているのである。

¹⁰ *Pensées* (1999), n. 105.

¹¹ *ETRMC* (1961): 407. "Godhigh" の字義的意味は、ジュリアンの母親の言葉から推測するに、過去にアメリカ南部において一時的栄光を勝ちえた地方の家柄を言うのだろう。だが、"a Godhigh" (ゴッドハイ家の出の人) というオコナーの言葉遊びが混じった姓をストーリーのコンテクストに沿って捉えると、「神の高みにあるかのような高慢な輩」とも読める。

¹² 生活習慣病 (life style-related disease) を患っていると思われる。

¹³ Beckett, Samuel. *The Unnamable*. New York: Grove Pr, 1958, 285ff.

¹⁴ Austin, J. L. *How to do Things with Words*. Oxford: Oxford UP, 92.

¹⁵ *ETRMC* (1961), 407.

¹⁶ *ETRMC* (1961), 407.

¹⁷ *ETRMC* (1961), 407.

¹⁸ *ETRMC* (1961), 407.

¹⁹ *ETRMC* (1961), 410. 須山 (2002), 154 : 「あのバスの乗客はだれもお母さんがどうい人間であるかなんてことにはかまわないですよ。」横山 (2009), 16 : 「あんなバスの乗客が、母さんの出身にこだわったりするもんか!」ここでは、the damn bus: [sq_{lan} the][_l damn][_l bus]の用法分析すれば事足りる。damn (A) は bus (N) の強調語であり、ジュリアンは「そのように言うことによって」、「母親に対して怒り、苛立ちを表明している」と考えられる。それゆえ、「あんな(業みみたいな)バスのなかで、母さんが誰かなんて、気に留める人なんかいやしないよ。」などと訳すのが妥当と思われる。また、母親がくり返す *I care who I am* (*ETRMC*(1961), 409-10) について、須山 (2002), 154. は「わたしは自分がどうい人間であるかってことにかまうわ。」とし。横山 (2009), 16. は「私のほうがこだわりのよ」としている。

[3] *Mrs. Godhigh*: I care who I am.²⁰

...

[3-A] *Julian*: You aren't who you think you are.²¹

「自分が何者なのか」をめぐる、母親が主張することをジュリアンが挫く。ジュリアンが否定することは、母親にとって肯定すべきこと。そして母親が主張することを、最終的かつ決定的なしかたで [3-A]、ジュリアンが否定してゆく。意味論的にみればノンセンス²²に収斂する会話は、親子の間にある確執と相容れなさであり、やがて訪れる「悲劇的な結末」を予感させる。

4.0 人間に巢喰う「高慢」の様相：ミセス・ゴッドハイの場合

高慢は、それを積極的に捉えるならば、高邁からの転落である。しかしながら、ミセス・ゴッドハイの高慢な言動には、そのことを裏打ちするものがない。

[3-1] All of her life had been a struggle to act like a Chestny *without* the Chestny goods, and to give him [Julian] *everything she thought a Chestny ought to have*...²³

くんだり

という件は、「所有していないものを所有していると誇ることに起因する高慢」(Superbia..., cum scilicet aliquis *iactat se habere quod non habet*.²⁴) の様相をよく表している。彼女の人生は「幻想世界」(her own fantasy world²⁵) 上の構築物なのである。その構築物は「自己賞揚」と「他者への優越感」に支えられている。

4.1 自己賞揚 (self-glorification/ self-admiration)

40年前は「高級住宅地だった」ところにアパートを借りて「住んでいる」ことに満足し、²⁶ 一人息子のジュリアンを、三流ではあるものの、「大学まで出した」ことを自負するミセス・ゴッドハイ。彼女の言動には、過去時制の多用による「追想的表現」(reminiscent expression)や状態動詞 (static verb) の *remember* が特徴的である自己賞揚に溢れている。

[4] Your great-grandfather *was* a former governor of this state.²⁷

Your grandfather *was* a prosperous landowner.²⁸

Your grand-mother *was* a Godhigh.²⁹

[5] Your great-grandfather *had* a plantation and two hundred slaves.³⁰

When I *was* a little girl...³¹

[6] Actually the place *belonged* to the Godhigh but your grandfather Chestny *paid* the mortgage and *saved* it for them. They *were* in reduced circumstances, ...but reduced or not, they never *forgot* who they were.³²

²⁰ ETRMC(1961): 410.

²¹ ETRMC(1961), 419. 母親に対してジュリアン放ったこの言葉は、最終的に、「母親を全面否定する容赦なき一撃」となる。

²² ミセス・ゴッドハイが「自分は〜である」と主張することを p とし、それを「ジュリアンが否定する」を $\neg p$ としよう。これとは逆に、ジュリアンが否定することは、ミセス・ゴッドハイにとっては肯定すべきことであることを考えれば、この二人の会話は $((p \wedge \neg p) \wedge (\neg p \wedge p)) \vee ((\neg p \wedge \neg p) \vee (\neg p \wedge p))$ あるいは $((p \wedge \neg p) \wedge (\neg p \wedge p)) \wedge ((p \wedge p) \vee (\neg p \wedge p))$ という論理式で表示できよう。これらの論理式の真値値 (truth-value) は、いずれも 0/F であり、意味論的にはノンセンスとなる。

²³ ETRMC(1961), 411.

²⁴ Aquinas S. T. (1980), II-II, q. 162, art 3, resp.

²⁵ ETRMC(1961), 411.

²⁶ ETRMC, p. 406.

²⁷ ETRMC(1961), 407.

²⁸ ETRMC(1961), 407.

²⁹ ETRMC(1961), 407.

³⁰ ETRMC(1961), 408.

³¹ ETRMC(1961), 408.

³² ETRMC(1961), 408.

[7] I remember the old darky lady who was my nurse, Caroline. There was no better person in the world. I've always had a great respect for my colored friends.³³

追想的表現や状態動詞の *remember* は、彼女が「今現在」をではなく、「過去」を生きていることを示している。チェストニー家の末裔³⁴にあたるゴッドハイ家の人間として、先祖の栄光と彼女の出自を語ることによって、さらには彼女がそこから踏み出すこともない幻想世界の掟に従って³⁵自分が何者かであると主張しているわけであるが、このような自己同一性の確保には当の確保すべき対象がない。あるものといえば、高慢に誘発された「自惚れ」³⁶である。

4.2 優越感 (sense of superiority/ arrogance/ haughtiness³⁷): 人種の偏見・嫌悪・蔑視 (racial prejudice, aversion to Niggers and an arrogant contempt for them)

ミセス・ゴッドハイに宿る人種の偏見・嫌悪・蔑視。彼女は、白人と黒人の混血である a half white の存在は「悲劇的だ」(They're tragic.³⁸)と見なす。黒人は「奴隷だったときの方がましだったのさ」(They were better off when they were.³⁹)とまで、平然と言いつける。「そのように言うことによって」、「彼女自身の問題性を露呈している」のであるが、それは自覚の圏外にある。

肌が黒いとか白いとかは、人間という存在の属性であり、本質ではない。黒人に対する「嫌悪」や「蔑視」は、彼らを取り込まれた社会と権力システムのなかで構築されてきたものであるが、ミセス・ゴッドハイは、彼女が背景としてもち、そこに生きてきたパワー・システムが作り出した *manners* —— 生活・思考・行動様式・他者のあしらい方 —— に染まりきって、黒人や a half white を見ているのである。

YWCA に向かうバスのなかに大柄な黒人が乗車してくると、彼女はジュリアンの脇腹を小突いて、

[8] Now you see why I won't ride on these buses by myself.⁴⁰

と囁く。それは「間接的」表現ではあるものの、そのように言うことによって、彼女自身が日頃から抱いている黒人に対する嫌悪感や蔑視を「露骨に」言い表している。それだけではない。同じく減量クラスに通う人々について、

[9] Most of them in *it* are not our kind of people. ...but I can be *gracious* to anybody. I know who I am.⁴¹...

³³ *ETRCM* (1961), 408: 18-9, 409.

³⁴ *ETRCM* (1961), 411.

³⁵ *ETRCM* (1961), 411.

³⁶ 「所有していないものを所有していると誇ることに起因する高慢」は、「自惚れ」(vanity)と解することもできる。高慢と自惚れの関係については、*Pensées* (1999), n. 384. 参照。オコナーがバスケル (Blaise Pascal 1623-62) — 彼もまた、高慢な自分自身と格闘した人間であった。 *Pensées* (1999), n. 182. に見られる覚え書きは、あきらかに、バスケル自身を反映してのことであると思われる。1654年11月23日の劇的回心後も、バスケルは高慢な自己を打ちちかくことはできなかった — に関心を示していることは、*HB* (1988), 304, 485; *MM* (1970), 161. における記述からも判明する。

³⁷ *OED* (2009) on CD-ROM, v. 4.0: "an unfriendly attitude towards other people because you think that you are better than them." *If you have too high opinion of yourself, something will happen to make you stupid.* という言葉通りの事態がジュリアンの母親に襲ってくる。

³⁸ *ETRCM* (1961), 408. Elie. Paul. "How Racist Flannery O'Connor was?" *New Yorker* (June 22, 2020) 参照。Elie は、オコナーが *Revelation* (1964) の校訂後に認めた Mary Lee 宛ての手紙のなかで、"You know, I'm an integrationist by principle & a segregationist by taste anyway. I don't like Negroes. They give me a pain and the more of them I see, the less and less I like them. Particularly *the new kind*." と記していることに注目している。オコナーが言及した "the new kind" という言葉のなかには、"the philosophizing prophesizing pontificating kind" と揶揄される黒人や *ETRCM* (1961) のなかで言及されている "a half white" (白人と黒人との混血) と称される人々も含まれていると思われる。この推測が正しければ、ミセス・ゴッドハイの "a half white" に対する嫌悪感は、オコナー自身の嫌悪感の反映であるとも考えられる。

³⁹ *ETRCM* (1961), 408.

⁴⁰ *ETRCM* (1961), 412.

⁴¹ *ETRCM* (1961), 407. 須山 (2002):150. では「世の中のほとんどの人たちはわたしたちと同じ類の人間ではないわ」とあるが、*it* (Pron) は YWCA の the reducing class に集まる人々を指示しているため、「世の中のほとんどの人たち」という訳は対象を拡大しすぎている。(試訳)「減量クラスにいるほとんどの人たちは、私たちみたいな人間じゃないわ。・・・私は誰に対しても憎み深くできるわ。私は、自分が誰なのかを分かっているのよ。」

と言うとき、ミセス・ゴッドハイが言いたいのは、「私は他の人たちのような人間ではない。⁴² そもそも私の出というものが違う」ということなのだ。そして「誰にでも (to *anybody*) 優しく、情け深く (*gracious*) できる」というのは、他者を「下手に見る」ことによって —— *gracious* [Adj] とは、他者を下手に見て懇懃に振る舞うことを、⁴³ そして *anybody* [Pron] とは、彼女が「自分よりも下手と見る人には誰にでも」ということを表している —— 自分を「肯定できる」からである。自身自身が「優越コンプレックス」に深く苛まれていながらも、それについては無自覚である人間のなせる業である。

さらに、バスに乗車してきた赤いバッグを持った大きな体躯をした黒人女性とその子供 カーヴァー (Carver) に対するミセス・ゴッドハイの言動は目に余るものがある。彼女はカーヴァーのしぐさを見て、

[10] Isn't he cute? ...I think he likes me.⁴⁴

と突然言い出し、彼の母親にも微笑みかけるのだが、じつのところ「その微笑みもまた、自分よりも下手に見ている人に対して特別情け深くなるときの微笑みなのである」(It was the smile she used when she was being particularly gracious to an inferior. ⁴⁵). . . . やがて、バスが目的地に着く直前のこと、彼女はカーヴァーに 5 セント硬貨をあげたいと言い出す。

[11] I want to *give* the little boy a nickel.⁴⁶

このばあい、「硬貨をあげたい」対象は自分より下手に見ている黒人女性の子供カーヴァーに対してであることを考えれば、発話者たるミセス・ゴッドハイの真意 (utterer's meaning) は、硬貨を「恵んでやりたい」ということにある、と考えるのが自然であろう。

ジュリアンは自分の母親がしようとしていることを強い語調で制する。

[11-1] "No!" Julian hissed. "No!"⁴⁷

しかしながら、母親は聞く耳をもたない。財布を開いて 5 セント硬貨を見つけようとする。だが、1 セント硬貨しか見つからない！そんな母親を見て、ジュリアンはふたたび強い語調で制する。

[11-2] "Don't do it!"⁴⁸

だが、母親はまったくの聞く耳もたず、である。それどころか、バスから降りるとカーヴァーを追いかけて行き、

[11-3] Oh little boy! Here's a bright new penny for you.⁴⁹

と言うのだ。

この一部始終を見ていたカーヴァーの母親は、憤怒を押さえきれず、彼女の黒い拳とともに赤いハンドバッグをミセス・ゴッドハイに振り下ろし、彼女を怒鳴りつける。

⁴² *NRSV* (2010), Luke 18:11.

⁴³ チェストニー家にいた黒人の子守女キャララインに対するミセス・ゴッドハイの「賞賛の真意」もここにある (*ETRCM* (1961), 409).

⁴⁴ *ETRCM* (1961), 417.

⁴⁵ *ETRCM* (1961), 417. 須山 (2002), 165-6. 参照。須山は、「an inferior」は「自分よりも劣っているもの」としているが、「I can be gracious to anybody」の事例でも指摘したように gracious (A) と an inferior [_{NP} an|s| inferior] は連動しているわけであるから、実際のところ、母親が「自分よりも下手に見ている人なら誰でも」ということになる。

⁴⁶ *ETRCM* (1961), 417.

⁴⁷ *ETRCM* (1961), 418.

⁴⁸ *ETRCM* (1961), 418.

⁴⁹ *ETRCM* (1961), 418. 須山 (2002), 167.

He *don't* take nobody's pennies!⁵⁰

そしてカーヴァーを連れて、そそくさとその場から去ってゆく。

カーヴァーの母親の言葉に圧倒されたミセス・ゴッドハイは歩道に座り込んでしまう。・・・やがて歩き出し、子供のように、

“Home.”

“Tell Grandpa to come to get me.”

“Tell Caroline to come get me.”⁵¹

と言うなり、歩道に崩れ落ちる (Crumpling, she fell to the pavement.⁵²)。

4.3 聖書のどんでん返し(Biblical reversals)

「高ぶりが来れば恥もまた来る」(People who are proud will soon be disgraced.⁵³)。「痛手に先立つのは高慢、転落に先立つのは高ぶるころ」(Pride goes before destruction, and a haughty spirit before fall.⁵⁴)。「誰でも高ぶる者は低くさる」(All who exalt themselves will be humbled.⁵⁵)という言葉を地で行く「聖書のどんでん返し」⁵⁶の事態が母親を待ち受けていたのである。それは修辞法的「アイロニー」の一語で語り尽くせる事態ではない。キリスト教的ヴィジョンに立脚してこそ明らめられ、把握できる事態である。

5.0 ナルシシズム (narcissism⁵⁷) に起因する高慢：その精神分析・社会心理学的的分析 (psychoanalysis and socio-psychological analysis of “superbia”)

⁵⁰ *ETRMC*(1961), 418: (訳註)「この子は、誰もわからない人の小銭なんか、もらいやしないよ！」いうまでもなく、Carverの母親の教育的背景が窺われる箇所であるが、*ETRMC*(1961)のなかでは主要問題ではない。“nobody's pennies”について、須山(2002), 168, は「この子はだから一セント玉なんかもらわないよ！」と訳し、横山(2009), 31, は「この子はお金なんか、だれからももらわないよ！」と訳出しているが、ここでは(1) nobody が他者(ジュリアンの母親)に対する手厳しい表現 (unkind or harsh response to others)であること、(2) nobody's fault (誰のせいでもない) のようにものごとの帰属対象(ここではジュリアンの母親ミセス・ゴッドハイのことであるが、カーヴァーの母親にとってどこの誰か知らない人物であることに変わりはない)に対する認識が定かではないことを考えると、「誰もわからない人の小銭」であると考えられる。つまり、「He don't take nobody's pennies!” という言葉は、一セント硬貨の問題だけではなく、その硬貨を差し出している当の本人の拒絶でもある。それゆえ、母親が受けたダメージは大きく、歩道に座り込んでしまうほどのものだった(*ETRMC*(1961), 418)と解釈するのが妥当である。

⁵¹ *ETRMC*(1961), 420.

⁵² *ETRMC*(1961), 420. 須山(2002):「くしゃくしゃになって、彼女は舗道に倒れた。」ここで「くしゃくしゃになって」「くしゃつと」と訳出された *crumpling* には、“suddenly flop down to the ground, collapse”(OED(2009^{2nd} ed on CD-ROM, v. 4.0))などの意味があり、「どさどさという音を立てて、歩道に崩れ落ちた」などの訳出も可能である。

⁵³ 「箴言」11:2 (日本聖書協会訳『聖書』1954改訂版, 1985)

⁵⁴ *NRSV*^v(2010), *Proverb* 16:18. 日本聖書協会口語訳(1985):「箴言」16:18:「高ぶりは破滅に先立ち、こころの高慢は倒れに先立つ。』『新共同訳』(2014):「痛手に先立つのは驕り、つまりさきに先立つのは高慢な霊。」

⁵⁵ 「マタイ」23:12『新共同訳』(2014)参照。ジュリアンの母親のように自己賞揚に走る人間は、自分自身が自分自身によって「報いを受けてしまっている (ἀντιχοῦτον μισθὸν αὐτῶν.(同6:16))に等しい (ἀντιχοῦτον < ἀντιχοῦ: 3 person, pl, present (to have in full what is due or is sought); μισθὸν < μισθός). それは、イエスの眼差しからすれば、「わざわざい」(οὐαί: woe)である (23:15. *NRSV*^v(2010)). 『新共同訳』(2014)では、οὐαίを一律に「不幸だ!」と訳出しているが(23:15, 16, 23, 25, 27, 29も同様)、これではイエスの言葉が響いて来ないと思われる(他に「コリント」1:26, 29-30, 「ヤコブ」4:6. 1ペテロ5:5等参照)。

⁵⁶ *GFL*(2014), 111ff. 人間が孕む問題性としての「高慢」への言及は『聖書』にも随所に見られる。「マタイ」23:12では、δοῦτε δὲ ὑμῶσι εὐαγγέλιον ταπεινοφροσύνης, καὶ οὐτως ταπεινοῦσι εὐαγγέλιον ὑψηλοφροσύνης「誰でも高ぶる者は低くされ、へりくだる者は高められる」(『新共同訳』(2014)と述べている。ὕψιστος εὐαγγέλιον「高ぶる」とも訳める。また、「ルカ」1:46ff. に基づく *Magnificat* (マリヤの讃歌)では、Fecit potentiam in brachio suo: dispersit superbos mente cordis sui。(神はその力を現わし、思い上がる者を打ち散らす)と唱われる。「思い上がる者」とは、「そのこころの思いのうちに傲り高ぶる者」(superbos superbos mente cordis)のことである(*superbus*: A. arrogant, haughty, proud, vain の名詞的用法。愛する者は高ぶらないが(「コリント」13:4)、他人を見下し高ぶる者(「ルカ」18:9; 「コリント」4:6) — これについては、知的高慢(intellectual arrogance)に陥り、ときにはそれによって他者を見下すようなことにも陥り易い「学識ある者」、高邁を目差しながらも高慢に陥り易い「宗教者」も例外ではない。学識・教養、社会的地位もまた自己の名声と栄光(human glory)を求めるための手段となり、それによって他者を見下す人々がいることは、われわれの世界における「生の事実」である。学識・教養が即人間性の陶冶とはならない現実については、Steiner. *Language and Silence*. London: Faber & Faber, 1967. のなかで、みごとに暴き出されている — は多く、そこには争いもまた生じる(「箴言」13:10参照)。

⁵⁷ ここで取り扱うナルシシズム(narcissism)は精神病理学(psychopathology)の研究対象としての「人格障害」(narcissistic personality disorder)ではない。*OED*(2009^{2nd} ed on CD-ROM, v. 4.0):“self-love and admiration that find emotional satisfaction in self-contemplation; the habit of admiring yourself too much”において述べられているような見方におけるナルシシズムである。この問題の古典的研究はフロイト(Freud, Sigmund. *On Narcissism*. London: Institute of Psychoanalysis, 1964, XIV, 73-102)に見られる。彼はナルシシズムをリビド(libido a sexual energy)との関連によって説明しようとした。リビドには *Ego-libido* と *Object-libido* があり(ibid., 76), 前者は自己に directed、後者は外的対象の排除あるいは外的対象からの撤退へと向かうとする。さらに、後者のほあい、利己主義にリビドが追加補充されたものが自己へと向かうことによって「ナルシシズム」を惹起するという(“The libido that has been withdrawn from the external

ミセス・ゴッドハイに巢喰う「高慢」という「悪徳⁵⁸」は、精神・社会心理分析の観点からすれば、「ナルシズム」に起因していると考えられる。

Erich Fromm (1900-80) は *The Heart of Man: Its Genius for Good and Evil* (1964⁵⁹) のなかで、ナルシズムに犯された人間の「精神分析・社会心理学的分析観点からみた特徴」について、以下のように述べている。

- A. [The narcissistic person] shows all the signs of self-satisfaction; one can see that when he [she] says some trivial words he [she] feels as if he [she] has said something of great importance.⁶⁰
- B. [T]he narcissistic person cannot perceive the reality within another person and as distinct from his own.⁶¹
- C. [He or She] usually does not listen what others say, nor is he or she really interested.⁶²
- D. [He/ She] reacts with intense anger when he [she] is criticized. He [She] tends to feel that the criticism is a hostile attack.⁶³
- E. Racial superiority feeling and racial discrimination: Good examples of this phenomenon in recent years are the racial narcissism..., which is found in *the American South* today. ...the core of *the racial superiority feeling* was, and still is, the lower middle class; this backward class, which ...in *the American South* has been economically and culturally deprived, without any realistic hope of changing its situation (because they are the remnants of an older and dying form of society) has only one satisfaction: *the inflated image of itself* as the most admirable group in the world, and *of being superior to another racial group that is singled out as inferior*. The member of such as backward group feels: "Even I am poor and uncultured I am somebody important because I belong to the most admirable group in the world - *I am white*"...⁶⁴
- F. The distortion of rational judgment: Narcissistic value-judgment is prejudiced and biased.⁶⁵ He [She] and his [her] are overevaluated. Everything outside is underevaluated. The damage to reason and objectivity is obvious.⁶⁶

A ~ F で述べられていることに、**3.0 ~ 4.2** で論述したミセス・ゴッドハイの言動事例等 [1] ~ [11-13] をあてはめてみると、

A: [1] [2] [3] [4] [5] [6]

B [8] [9]

C: [11-1] [1-2]

D: [2]

E: [1] [7] [8] [9] [10] [11]

F: [3-1], A ~ E に対応する言動事例全般⁶⁷

world has been directed to the ego and thus gives rise to an attitude which may be called narcissism (ibid.)⁷⁰。しかしながら、このようなリビドへの還元主義 (libidinal reductionism) に基づくナルシズム解釈は、結果的に、彼自身の研究を狭隘なものにしたことは明らかである。これに対して、フロム (Erich S. Fromm, 1900-1980) はナルシズムの概念を社会・文化的なレベル、さらには宗教的なレベルまで適用範囲を広げる。フロイトとは異なり、愛の対極であるナルシズムは、「他者への関心と愛の成長とともに、しだいに減少してゆく」と考える (*Greatness and Limitations of Freud's Thought*, London: Abacus, 1982, 45, 53)。

⁵⁸ 「悪徳 (vice) は "badly disposed" のこと。すなわち、実際に悪しき行為に出ているのではないが、いつでもそのような行為に出る「潜在的・可能状態」をいう。
⁵⁹ *HM* の初版は 1964 年 (この論考では 1968 年版を使用) であり、オコナーの *ETMCM* は 1961 年の出版である。つまり、フロムの研究は「オコナーが生きた当時のアメリカ南部白人におけるナルシズムの構造、それによって引き起こされる人種間問題の様相」を **up-to-date** に映し出していると考えられる。

⁶⁰ *HM* (1968), 70.

⁶¹ *HM* (1968), 68.

⁶² *HM* (1968), 70.

⁶³ *HM* (1968), 74.

⁶⁴ *HM* (1968), 79.

⁶⁵ *HM* (1968), 73.

⁶⁶ *HM* (1968), 74.

⁶⁷ *ETMCM* (1961) のストーリー全般に亘って分析すれば、ミセス・ゴッドハイのナルシズムに関する広範囲に亘る裏付けができるが、ここではその必要性が

などに類型化される。そこからは、「深刻なまでにナルシズムに犯されながらも、それに無自覚なまま人生を彷徨する」ミセス・ゴッドハイという人物像が浮かび上がってくる。

ミセス・ゴッドハイに巣喰う高慢、すなわち「自己賞揚」や「他者への優越感」などをもってする自己肯定は、—— その自己肯定は、肯定すべき実体を欠如しているがゆえに、こっけいにして悲惨に見える⁶⁸ —— ナルシズムの典型例であり、今現在の自分に得心がゆかず、じつところ「他者はもちろんのこと自分をも愛してはいない⁶⁹」悲惨な状況にある彼女自身の反照である。

6.0 高慢：人間が孕む問題性 (the problematic nature of mortals) とオコナーの眼差し

精神分析・社会心理分析学は、人間に巣喰う高慢がナルシズムに起因することを教える。しかしながら、存在論的観点から見ると、高慢の根はより深いところにあると思われる。高慢、それは「人間が孕む深刻な問題性」のひとつなのである。

「問題性」と訳出した“problematic”⁷⁰という語の辞書の意味は、「曖昧で」(dubious)、「落ち着きなく」(unsettled)、「問題含みで」(full of problems)「扱い難く」(hard to deal)、さまざまな「問題を引き起こす」(bringing about or giving rise/ cause problems, causing difficulty)、「不安定な」(uncertain) な人間を浮き彫りにする。このような人間が「自分もっていないものを、もっている」と鼻にかけ (aliquis iactat se habere quod non habet⁷¹)、「自分が現に在る以上に自分を大きく評価し」(de se maiora existimat quant sunt⁷²)、高慢という「正しい分別に依らない、節度を欠いた卓越性への欲望を引き起こす」(Superbia impotat immoderatum excellentiae appetitum, qui scilicet non est secundum rationem rectam.⁷³) に至るのである。つまり、高慢は、それが陶冶されないかぎり、程度の差こそあれ、誰しものが容易に陥りやすい悪徳であり、人と人との調和を破壊し、対立を生む要因となる。⁷⁴

オコナーは、このような問題性を孕む人間を「神の恩寵の不在状態」—— ミセス・ゴッドハイのように高慢な言動はその事例である —— としての「原罪」(original sin) と「キリストによる贖罪」(redemption) の必然性との関係で見つめていたと思われる。

では、オコナーがもっていたと思われる「原罪の概念」はどのようなものだったのか。推測するに、*Baltimore Catechism* (1885 初版)⁷⁵ —— Jill P. Baumgaertner⁷⁶ は、オコナーが幼少時からこのカテキズムにもとづくカトリックの信仰教育を受け、その影響は後年の作品群、*The Life You save may be Your Own* (1953), *The Displaced Person* (1954), *The Artificial Nigger* (1955), *The Enduring Chill* (1958) などの作品構成にもみられることを明らかにしている。このことは、

ない。

⁶⁸ フロムは、“Many artists and creative writers, music conductors, dancers and politicians are extremely narcissistic. Their narcissism does not interfere with their art: on the contrary it often helps. ...The completely untalented narcissist, on the other hand, may be ridiculous (GLFT (1982), 48-9)”と述べているが、ジュリアンの母親の言動がときに「こっけい」に思えるのは、実体なき「ナルシスティック的な高慢」だからである。では、「とりわけ控えずで謙遜」と称される人物はどうか？フロムは以下のように述べている：“Not only do such people often try to hide their narcissism, they satisfy it at the same time by being narcissistically proud of their kindness or modesty. ...Narcissism wears many masks: saintliness, obedience to duty, kindness and love, humility, pride. It ranges from the attitude of a haughty and arrogant person to that of a modest and unobtrusive one (p. 51).” Cf. *HM* (968), 70: “It is not rare for a person’s narcissistic orientation to take his humility as the object of his self-admiration.” オコナーが愛読したアキナスは、“Superbia et inanis gloria occasionem sumunt praecipue a bonis, etiam sibi contraritis, puta cum de humilitate aliquis superbit.” “高慢と虚栄は — それをまったく自己矛盾しているのだが — 概してさまざまな良いことによっても引き起こされる。ある人が自分の謙遜を誇るように、である”と、述べている (*Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 38, art. 2, ad. sol. 3m).

⁶⁹ Fromm, Erich. *Escape from Freedom*. New York: Avon Books, 1965, 137.

⁷⁰ *OED* (2009nd ed on CD-ROM, v. 4.0): *Cambridge Dictionary + Plus* (Cambridge University Press, 2022).

⁷¹ *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 162, a. 3, resp.

⁷² *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 162, a. 3, ad. sol. 2.

⁷³ *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 162, a. 4, resp.

⁷⁴ *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 162, a. 4, resp. 「節度を欠いた卓越性への欲望」と訳した “immoderatum excellentiae appetitum” とは、「節度なきしかたで、自分が優れていると誇るような欲望」ともいえる。

⁷⁵ *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 37, resp: “Discordia est peccatum, in quantum... concordiae contrariatur.” 「対立は、平和・一致とは相容れないといういみで、悪である。」 Cf. *Aquinas S. T.* (1980), II-II, q. 162, a. 2, resp.

⁷⁶ *The Catholic Primer*: www.catholicprimer.org, 2005. *Baltimore Catechism* (1891)は、オコナーがカテキズム教育を受けるさいに使用したものと考えられる。

⁷⁷ Baumgaertner, Jill P. “Flannery O’Connor and the Cartoon Catechism inside the Church of Flannery O’Connor: Sacrament.” *Sacramental and the Sacred in Her Fictions*. Ed. Joanne H. McMullen and Jon P. Peede. Macon, Georgia: Mercer UP, 2008, 104-6.

彼女が受けたカテキズム教育がどれほど深く彼女の魂に、そして自らの生き方（ものの見方・考え方）に染み込んでいたのかを物語っている——のなかでが述べられているような、「伝統的なもの⁷⁷」であったと思われる。

「伝統的なもの」とは、人間の始祖（アダムとイヴ）が犯した罪の「遺伝的理解⁷⁸」である。このことは *Baltimore Catechism* の問答（Catechism No. 2, Lesson 5th: On Our First Parents and the all）のなかで以下のような問答形式で言及されている。

43. Q. Did Adam and Eve remain faithful to God?

A. Adam and Eve did not remain faithful to God; but broke His command by eating the forbidden fruit.⁷⁹

44. Q. What befell Adam and Eve on account of their sin?

A. Adam and Eve, on account of their sin, lost innocence and holiness, and *were doomed to sickness and death*.

45. Q. What evil befell us on account of the disobedience of our first parents?

A. On account of the disobedience of our first parents, we all *share* in their sin and punishment, as we should have shared in their happiness if they had remained faithful.

46. Q. What other effects followed from the sin of our first parents?

A. Our nature was *corrupted* by the sin of our first parents, which darkened our understanding, weakened our will, and left in us a strong inclination to evil.

47. Q. What is the sin called which we *inherited* from our first parents (Adam and Eve)?

A. The sin, which we *inherit* from our first parents, is called *our original sin*.

48. Q. Why is this sin called original?

A. This sin is called original because it *comes down to us* from our first parents, and we are brought into the world with its guilt on our soul.

49. Q. Does the *corruption* of our nature remain in us after original sin is forgiven?

A. This *corruption* of our nature and other punishments remain in us after original sin is forgiven.

要約：人類の始祖（アダムとその伴侶イヴ）が、彼らの創造主たる「神への不服従ゆえに」もたらした結果は、—— *share* (V), *inherit* (V), *corrupt* (V), *corruption* (N), *comes down* (Phr V) という語句が示すように——彼らの子孫たる全人類に遺伝的に受け継がれるものとなった。⁸⁰ 人間は無垢と聖性を失い、病に見られる身体的脆弱さを持ち、そして死へと運命づけられた存在 (a mortal⁸¹) となった (44. 49 Q & A)。人間の本性は損なわれ、知性は翳り、意思は薄弱となり、わたしたちのなかに根深い悪への傾きが残った。⁸²

⁷⁷ *HB* (1988), 350: "I accept the same fundamental doctrine of sin and redemption and judgement that they [people in the South] do." 1925年にジョージア州サヴァンナ (Savannah) で生まれたオコナーは、同市にある洗礼者ヨハネ司教座聖堂付属 St. Vincent's Grammar School で初等教育を受けた (op.cit., Jill P. Baumgaertner (2008), 103)。学校の成績で一番良かったものはカテキズム (Catechism) — カトリック教会の教えを Q & A 形式で要約した *Baltimore Catechism* を用いた信仰教育 (ibid. 102nd) — であった。オコナーは両親と共にミサに毎週出かけるほど信心深い子供でもあった (Brad Gooch, Brad. *Flannery: A Life of Flannery O'Connor*. Back Bay Books: New York, 2010, 32-33)。

⁷⁸ *CCC* (1994), n. 402^{ff}. では、原罪の遺伝は「神秘的なもの」と述べられている。これは熱烈なカトリック信仰の弁護者であったバスカルのいう「原罪の遺伝という神秘」と同様の理解である。「神秘のなかでもっとも計り知れないこの神秘なくして、われわれは自分自身を理解することはできない」と、バスカルは言う (*Pensées* (1999), n. 164)。

⁷⁹ Cf. *CCC* (1994), n. 398.

⁸⁰ しかしながら、現代においては、このような原罪の遺伝的理解については、注意深いかつ説得的な説明が必要であろう。信仰は「理非を分別しない信じ込み」ではないからである。Brian Davies は、*Summa Theologiae* I-II, q. 81, a. 1, resp. に基づいて "We cannot, says Aquinas, inherit sin as we can inherit our parents' good looks or their intellectual abilities. ... original sin is, in a serious sense, not sin on our part at all. We are not... responsible for any action of Adam. The disorder which is in an individual human being, a descendent of Adam is not voluntary by reason of his or her personal will. ... the descendants of Adam are born in need of God's grace, considered as what raises people to perfect union with God. Original sin is the sin of the individual person only because *her* receives human nature from the first parents." と述べているが (Thomas Aquinas's *Summa Theologiae*, Oxford: Oxford UP, 2014, 208)。これは原罪を強的に「遺伝的なもの」と捉え、それによって人間存在全体を決めてかかる見方を矯正するというみで、建設的な理解であろう。

⁸¹ *OED* (2009^{2nd}) on CD-ROM, v. 4.0: "a human being in contrast with an immortal; a human being subject to death, as opposed to a divine being" (*Oxford Dictionary of English*, 2nd Oxford: Oxford UP, 2005). Cf. *Aquinas S. T.* (1980), I-II, q. 85, a. 5, resp: "Unde etiam mors, et omnes defectus corporales consequentes, sunt quaedam poenae originalis peccati."

⁸² アキナス (*Aquinas S. T.* (1980), q. 85, a. 4, resp.) は、「理性は（善と悪についての）とりわけ実際の判断において曖昧となり、意志は悪に対して凍り付き（不明瞭となり）、良き行いはより困難となる」(…inquantum scilicet per peccatum et ratio hebetatur praecipue in agendis; et voluntas induratur ad

このような原罪の伝統的な理解に基づいてオコナーの眼差しを追究してゆくと、ミセス・ゴッドハイの存在状況がいつそう明らかになってくる。彼女に巢食う高慢は、あきらかに、意図的なものではない。⁸³ その言動は問題含みではあるが、白人種たる彼女のみに特有なことではない。

Revelation (1964) に登場する Mrs. Turpin のような肌の黒い人間に特有なことでもない。つまり、人種間問題に収斂する問題でもない。このことは、今なお米国を中心に見られる時代錯誤にみちた白人至上主義者たちによるアフリカン・アメリカンに対するヘイト・クライム、そのアフリカン・アメリカンたちによる黄色人種と見なされるアジア人に対するヘイト・クライム、同じ黄色人種にして民族主義的な日本人活動家たちによる他のアジア諸国の人々に対するヘイト・クライムなどを見れば明らかである。

ミセス・ゴッドハイに巢食う高慢とは、「原罪」ゆえに損なわれた人間本性が孕む問題性——それは、オコナー自身が孕む問題性の反映であると思われる。⁸⁴ そのゆえに、この問題性を前にして、「作品の書き手としてのオコナー」と「信仰者としてのオコナー」との関係は透明に見えてくる。彼女は、自らもまた「キリストによる贖罪」を必要とする人間として、この作品世界に向かい会っていると思われる——の典型例なのである。

7.0 ジュリアン：「高慢」のもう一つの顔

母親のミセス・ゴッドハイという「鏡」に息子ジュリアンの実像と欺瞞性 (hypocrisy) が映し出される。自分自身は母親が抱くような人種の偏見のない人間だと見なし、母親に「人間社会のレッスン⁸⁵」を与えようとする息子のジュリアンは、「高慢」のもう一つの顔である。⁸⁶

人生を悟りきったかのように生きるジュリアン。実生活では、煙草代にも窮し 50 代の男のように世の中に幻滅している。前途もない自分自身の生活現状を理解してはいるが、⁸⁷ 彼もまた母親に似て自身が直面する現実とは乖離するほど高慢であるがゆえに、自分を正視できていない。⁸⁸ 自分の人格の未熟さに気づかず、生活を母親に依存しているにもかかわらず、当の母親を非難・攻撃するという自己欺瞞に陥っている。

bonum; et maior difficultas bene agenda accrescit...) と述べている (Aquinas S. T. (1980), q. 85, a. 4, resp).

⁸³ ジュリアンの母親と *A Good Man is Hard to Find* に登場する祖母 (Grandmother) の類似点については、HB (1988), 389.

⁸⁴ オコナーが社会的場面における「積極的人種差別主義者」であったと断定するには、より明確な根拠付けが必要となる。知人との手紙のやりとりの内容から判明するのは、オコナー自身のなかにある相克である。彼女は、黒人の苦難がわれわれ人間の罪や悪がもたらした結果からの解放へと導く「贖罪の本質」(redemptive quality) をもつと見る反面 (HB (1988), 78. の記述参照)、彼らに対する「強い人種の嫌悪感」も抱いていたということである。この問題に関する最近の議論としては、注 40 で言及した Elie. Paul. (June 22, 2020 Issue) の他に Alaimo O'Donnell, Angela. "The Cancelling of Flannery O'Connor?" *Commonweal* (August 3, 2020). Elie. Paul. "Confronting Flannery O'Connor's Racism. *Commonweal* (August 12, 2020) を参照。彼の論文のなかで言及されている「オコナーにまつわる人種差別問題」は以下の通りである。

p. 6: "About the Negroes, the kind I don't like is the philosophizing prophesying pontificating kind, the James Baldwin kind. Very ignorant but never silent. Baldwin can tell us what it feels like to be a Negro in Harlem but he tries to tell us everything else too. M. L. King I don't think is the ages great saint but he's at least doing what he can do & has to do. Don't know anything about Ossie Davis except that you like him but you probably like them all. My question is usually would this person be endurable if white. If Baldwin were white nobody would stand him a minute. I prefer Cassius Clay. If a tiger move into the room with you," says Cassius, "and you leave, that don't mean you hate the tiger. Just means you know you and him can't make out. Too much talk about hate." Cassius is too good for the Moslems."

p. 7: "Although she is palpably anguished about O'Connor's race problem, she winds up reprising those earlier arguments in current literary-critical argot, treating O'Connor as 'transgressive in her writing about race' but prone to lapses and excesses that stemmed from social forces beyond her control. ...It suggests that white racism in Georgia was all-encompassing and brooked no dissent, even though (as O'Donnell points out) Georgia was then changing more dramatically than at any point before or since. Patronizingly, it proposes that O'Connor, a genius who prized detachment, lacked the free will to think for herself."

p. 8: "Invoking Morrison, O'Donnell argues that O'Connor's fiction is fundamentally a working-through of her own racism, and that the offending remarks in the letters tell us... that O'Connor understood evil in the form of racism from the inside, as one who has practiced it... The clinching (the definite/decisive) evidence is *Revelation*, drafted in late 1963. After revising *Revelation* in early 1964, O'Connor wrote several letters to Maryat Lee. Many scholars maintain that their letters (often signed with nicknames) are a comic performance, with Lee playing the over-the-top liberal and O'Connor the dug-in gradualist, but O'Connor's most significant remarks on race in her letters to Lee are plainly sincere. On May 3, 1964 — as Richard Russell, Democrat of Georgia, led a filibuster in the Senate to block the Civil Rights Act — O'Connor set out her position in a passage now published for the first time: 'You know, I'm an integrationist by principle & a segregationist by taste anyway. I don't like Negroes. They all give me a pain and the more of them I see, the less and less I like them. Particularly the new kind.' Two weeks after that, she told Lee of her aversion to the 'philosophizing prophesying pontificating kind.'"

⁸⁵ *ETRCM* (1961), 414.

⁸⁶ ジュリアンは *The Enduring Chill* (1958) の Asbury や *Revelation* (1964) に登場する Mrs. Turpin と近似的存在として描写されている Cofer. Jordan. *The Gospel according to Flannery O'Connor*. New York and London: Bloomsbury, 2014, 111ff. 亀田 (2011), 172-183.

⁸⁷ *ETRCM* (1961), 411, 413.

⁸⁸ *ETRCM* (1961): 411.

しかしながら、「カーヴァーの母親」の言葉に圧倒され、今や歩道に倒れて身動きしない「自分の母親」を前にしたとき、

“Help, help!”⁸⁹

と叫ぶしかない「自分自身」に直面させられる。その叫びは自分の母親を助けたいとの一心からものであるとともに、今や途方に暮れ、どうしようもない状況に陥ってしまった彼自身の叫びとなる。

後悔先に立たず (Regret does not help/ It was too late for him to regret what he has done.)。彼もまた母親と同じく「誰でも高ぶる者は低くさる」という言葉を地で行く「聖書的どんでん返し」の事態に遭遇することになる。オコナーは、その事態に遭遇したミセス・ゴッドハイと息子ジュリアンがおかれた状況を、

The tide of darkness seemed to sweep him back to her, postponing from moment to moment his entry into *the world of guilt and sorrow*.⁹⁰

と書いて、筆を擱いている。

ジュリアンは、やがて訪れる母親に対する罪責感とその反照としての悲嘆に曝されることになる。それはすなわち「彼自身に巢食う問題性」—— この問題性は、母親と似たり寄つたりの存在状況にある彼自身を母親へと押し流してゆく「無明の潮流」(the tide of darkness)としてアレゴライズされている—— が暴露されることによって、自分自身と真摯に向かい会わざるをえない「時」が刻々と、しかも確実に近づいていることをいみする。

モラトリウム人間としてのジュリアン、いたずらに時を費やし、自分の人生に執行猶予 (grace) を与え続けてきたジュリアンという人間は、ここに終焉を迎えた。彼は、かくして、「恩寵の扉」(the gate of *the divine grace*) の前に立ったのである。

8.0 この作品世界を貫くオコナーの眼差しの「彼方へ」

人間の傲慢は、その悲惨さに見合う。「自分が悲惨である」ことを自覚できるのは人間のみである。⁹¹ だが、その自覚に至る者は少ない。*ETRMC*(1961) という作品世界は、そのような人間の現状をみごとに暴き出している。しかしながら、オコナーの眼差しの領界がそこで尽きてしまっているわけではない。つまり、「絶望を飼い慣らし、絶望とともに幸福に生きることを習い覚えた時代⁹²」に生きる人間の「現状態」を暴き出すことで、この作品世界が「閉じられている」わけではない。

この作品世界は、「聖書的どんでん返し」に遭遇したミセス・ゴッドハイと息子ジュリアンに仮託された—— ジュリアンと彼の母親の存在は関数概念である。母親を x 、ジュリアンを y とし、それぞれにこの作品の読み手である第一人称で表示される一人一人の「わたし」を挿入してみるとよい。すると、この作品が紡ぎ出す「虚構世界」が担う意味は抽象的なものではなく、「可能

⁸⁹ *ETRMC*(1961), 420.

⁹⁰ *ETRMC*(1961), 420. (須山 (2002), 171:「例の潮のような闇が彼を押し流して彼女の方にもどって行かせるように思われ、彼が罪と悲しみとの世界にはいるときを刻一刻と遅らせているようだった。」横山 (2009), 35:「暗黒の汐がジュリアンをさらって母親のいる場所に連れ戻し、罪と悲しみの世界に入るのを一瞬一瞬遅らせていた。」)とある。(試訳):「無明の潮流は、ジュリアンを母親へと押し流しているようであった。彼が罪悪感と悲嘆の世界へと入りこんでゆく時を刻一刻と遅らせながら。」ここで「無明」と訳出した“darkness”を聖書的概念 (ή σκοτία / τό σκοτός) として捉えたと、人間の「盲目的状況」(blindness)、「人間のこころの闇」と考えることもできる(「マタイ」 6:23: “εἰ οὖν τὸ φῶς τὸ ἐν σοὶ σκοτός ἐστί, τὸ σκοτός πόσον.” 「あなたの内にある光が暗ければ、その闇はいかほどのものであろうか。」「マタイ」 4:16, 「ヨハネ」 1:5, 8:12, 3:19, 12:35, 46, 「使徒」 13:11, 26: 18, 「II コリント」 6:14, 「エペソ」 6:12, 「コロサイ」 1:13, 「I ペテロ」 2:9, 「I ヨハネ」 1:5, 2:8, 9, 11 参照)。

⁹¹ 「人間の偉大さは自己の悲惨を自覚できることにある。神と自己の悲惨さを知らずして、イエス・キリストを知ることはできない。真の宗教は人間に偉大さと悲惨を教えるものでなければならぬ」とパスカルは述べている (*Pensées* (1999), n. 35, 146, 155; 182, 690, 704)。

⁹² *MM*(1970), 159: “an age that has domesticated despair and learned to live with its happily” という言葉は、幻想をもち、苛烈な眼差しをもって人間を、その人間が生きる現実を凝視したフラナリー・オコナーの人となり輪郭づける。

世界」として「読み手」であるわれわれに開かれていることが判明する。⁹³ さらに「虚構世界」としての *ETRMC*(1961) の世界と、われわれが「現実」と呼び、そこに棲み慣れている世界の接点も確認できよう⁹⁴ —— 悲惨な存在状況にありながらも、それを自覚しえない人間の「行く末」を見遣り、「その彼方へ」と「開かれている」と思われる。

この作品世界の「開放性」は、オコナーのカトリック的ヴィジョン、すなわち「生きとし生けるものへの肯定的眼差し」を反映している。彼女が *The Catholic Novelist in the Protestant South* (1966)⁹⁵ や *The Habit of Being* のなかで述べていることは、そのヴィジョンを明確に裏付ける。

[The Catholic novel] cannot see man as determined; it cannot see him as totally depraved. It will see him as incomplete in himself, as prone to evil, but as redeemable when his own efforts are assisted by grace. And it will see this grace as working through nature, but as entirely transcending it, so that a door is always open to possibility and the unexpected in the human soul. Its center of meaning will be Christ; its center of destruction will be the devil.⁹⁶

Grace with the Catholic way of thinking, can and does use as its medium the imperfect, purely human, and even hypocritical.⁹⁷

オコナーが述べていることの根底には、「恩寵は自然を壊滅させるのではなく、かえってそれを完成へともたらす」(*Gratia non tollat naturam, sed perficiat.*)⁹⁸ という「カトリック的ヴィジョン」がある。このヴィジョンは「すべて存在するものは、存在しているというかぎりにおいて、善いものである」(*Omne ens, inquantum est ens, est bonum.*)⁹⁹。「神は存在するすべてのものを愛される」(*Deus Omnia quae sunt, amat.*)¹⁰⁰。いかにいわんや罪人(的外な生き方をしている人間)をや、¹⁰¹ という人間存在への肯定的なヴィジョンと同調する。さらに、*Gratia non tollat naturam, sed perficiat.* という命題にある *natura* [N] を生物自然界における生物の基軸である「人間」に例えるならば、—— 晩年のオコナーに深い影響を与えたティヤール・ド・シャルダン(Teilhard de Chaldin, 1881-1955)の著作から採られた“Everything That Rises Must Converge”(すべて立ち上がるものは、万物の終局点(omega point)である「キリスト」へと収斂する)という題名が示しているように¹⁰² —— “今はかくあれども、恩寵によって立ち上がる者は、その命

⁹³ *MM* (1970), 78: “...the novel...is away to have experience.”

⁹⁴ *MM* (1970), 96. 亀田 (2009), 2: 亀田政則「退任記念講義・フィクションと現実：なぜわれわれはフィクションを読むのか?」『福島県立医科大学看護学部紀要』22 (2020), 1-12.

⁹⁵ *MM* (1970), 237.

⁹⁶ *MM* (1970), 196-7.

⁹⁷ *HB* (1988), 389.

⁹⁸ *Aquinas S. T.* (1980), I, q. 1, a. 8, ad 2.

⁹⁹ *Aquinas S. T.* (1980), I, q. 5, a. 3, rep. cf. q. 5, 1, resp: “bonum et ens sunt idem secundum rem, sed different secundum rationem tantum.” (「善いもの」と「存在するもの」は同一であり、たんに観点において異なるだけである。)

¹⁰⁰ *Aquinas S. T.* (1980), I, q. 20, a. 2, resp.

¹⁰¹ *Aquinas S. T.* (1980), I, q. 20, a. 2, ad 4: “Deus autem peccatores, inquantum sunt naturae quaedam, amat, sic enim sunt et ab ipso sunt. In quantum vero peccatores sunt, non sunt, sed ab esse deficient; et hoc in eis a Deo non est. Unde secundum hoc ab ipso odio habentur.” 「神は、自然的存在物のひとつであるというかぎりにおいて、罪人をも愛する。彼らは「そのように存在している」のであって、その存在は神に由来するからである。しかしながら、彼らが罪人であるかぎりにおいて、(真正しいみにおいて)存在してはおらず、存在を喪失している(真性な存在ではない)のである。このような存在の喪失は、神に由来するものではない。この点において、彼らは神に憎まれる。」

¹⁰² ティヤールに関する言及は、*HB* (1988), 387-8, 430, 438, 449, 509, 571; *The Presence of Grace and Other Book Reviews by Flannery O'Connor*. Ed. Carter W. Martin. U of Georgia P. 2008, 86, 108, に見られる。オコナーが抱いていた「恩寵は自然を壊滅させるのではなく、かえってそれを完成へともたらす」というヴィジョンは、ティヤールの「キリスト教的進化論」における人間の変容の可能性と矛盾なく調和していったと考えても、矛盾が生じない。アキナスの神学的ヴィジョンの生物進化的論的焼き直しと見ても違和感がない。オコナーが英語版で読んだと思われる *The Phenomenon of Man* (英語訳初版 1955: 美田絵訳『現象としての人間』みすず書房、1969) のなかで、ティヤールはつぎのように述べる。人間を基軸とした世界が終末(成熟と脱出が同時に起こるような臨界点)を迎えるとき、すなわちオメガ・ポイント(omega point: Christ)に収斂する(converge)とき、人間の自我は小さくなり、やがて消滅してゆく。それにつれて人間悪も最小限に減ってゆく、人間の憎悪もやがて消滅してゆく(21ff, 348-9)。オメガ・ポイントたる「キリストは(愛にもとづく)統合と昇華という永続的な行為によって・・・すべてを結集し、すべてを変容させる」(337, 363)。このことを、単純に敷衍して言えば、「高慢」のような人間に鼻喰う問題性や人種差別、憎悪などの人間悪もまた減少・消滅の道を進むことになるわけだが、果たしてそうか? オコナーの作品の題名 *Everything That Rises Must Converge* は、Pierre Teilhard de Chaldin, *Building the Earth and the Psychological Conditions of Human Unifications*. New York: Avon Books, 1969, 11. に由来する。その序文では、*Everything that rises must converge* という言明に至るまでのティヤールの論点がよくまとめられている。(“The peoples of the Earth, “the natural units of humanity” must, he said, achieve terrestrial Harmony through the variety of their racial characteristics - characteristics which reciprocally enrich each other. He gave each of them this watchword: “Remain on your own line, but move ever upwards towards greater consciousness and greater love. At the summit you will find yourselves united with all those who, from every direction, have made the same ascent. For everything that rises must converge.”)。ティヤールの *ETRMC* (1961) への影響については、Roslyn Barnes 宛の手紙 (*HB* (1988), 438) や Thomas Stritch 宛の手紙の手紙のなかに見いだされる (*HB* (1988), 449)。

尽きるまで変容しうる存在」とも考えることができる。このことは「聖書のどんでん返し」に遭遇した「右も左もわきまえず¹⁰³」高慢な言動に走るミセス・ゴッドハイ、そして同じ問題性を孕む自分自身に瞑目し、自己欺瞞の日々を送っていた息子ジュリアンといえども、その例外ではない。では、この作品世界の「読み手であるわれわれ」は？

引用・参考文献（略記）

- Aquinas S. T.* (1980): *Aquinas S. T. Summa Theologiae*. Stuttgart-Bad Cannstatt: Friedrich Formmann Verlag, 1980.
- CCC* (1994): *Catechism of the Catholic Church*. London: Geoffery Chapman, 1994.
- ETRCM* (1961): “Everything That Rises Must Converge.” *The Complete Stories of Flannery O'Connor*. London: Faber and Faber, 1990.
- HB* (1988): *The Habit of Being: Letters of Flannery O'Connor*. Ed. Sally Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1988.
- HM* (1968): Fromm, Erich. *The Heart of Man: Its Genius for Good and Evil*. New York & London: Harper and Row, 1968
- MM* (1970): *Mystery and Manners*. Ed. Sally and Robert Fitzgerald. New York: Farrar, Straus and Giroux, 1970.
- Nestle-Aland* (2005): *Noveum Testamentum Graece et Latine*. Ed. Barbara Aland, et. al. Tübingen: Deutsche Bibelgesellschaft, 2005.
- NRSV*⁵ (2010): *The New Oxford Annotated Bible* (5th edition). Oxford and New York: Oxford UP, 2010.
- OED* (2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0): *The Oxford English Dictionary*, 2009^{2nd} on CD-ROM, v. 4.0.
- Pensées* (1999): Pascal. Blaise. *Pensées and Other Writings*. Trans. Honor Levi, Oxford: Oxford Univ. Press, 1999.
- UBSNT* (2007): *The UBS Greek New Testament* (4th Revised). Ed. Barbara Aland, et. al. Tübingen: Deutsche Bibelgesellschaft, 2007.
- 『新共同訳』(2014): 『新共同訳聖書』日本聖書協会, 2014.
- 亀田 (2009): 亀田政則「病の言語」『福島県立医科大学看護学部紀要』11 (2009), 1-6.
- 亀田 (2011): 亀田政則「アズベリーは病床で何を見たのか — フラナリー・オコナー『長引く悪寒』論攷」『キリスト教文学研究』29 (2011), 172-183.
- 亀田 (2020): 亀田政則「オコナーの作品構築に見るカトリック・アイデンティティ」『フラナリー・オコナー研究』日本フラナリー・オコナー協会, 2 (2020), 6-23.
- 須山 (2002): 須山静夫訳「高く昇って一点へ」『オコナー短編集』新潮文庫, 2002, 145-172.
- 横山 (2009): 横山貞子訳「すべて上昇するものは一点に集まる」『フラナリー・オコナー全短篇』（下巻）ちくま文庫, 2009, 5-35.

*この論考は2023年度（第52回）日本キリスト教文学会全国大会（岡山・ノートルダム清心女子大学）で発表されたものに加筆・補正を施したものです。

謝辞：この論考の作成にあたっては、久保尚美先生（中央大学文学部准教授）から多大なご助力をいただきました。ご提供いただきました「オコナーとカテキズムにかんする資料」なくして、6.0**の論述は困難でした。ここに、ここらからの感謝の意を表します。

¹⁰³ 『新共同訳』(2014)「ヨナ書」3:11. *HB*(1988), 449.

【会 則】

第1条 本会は日本フラナリー・オコナー協会(The Flannery O'Connor Society of Japan)と称し、略称を FOSJ とする。事務局を附則のとおり置く。

第2条 本会はフラナリー・オコナーを中心として、関連ある作家や文学の流れについて研究を行うことを目的とする。

第3条 本会は前条の目的を達成するため次の事業を行う。

1. 年次大会の開催
2. 機関誌等の発行
3. アメリカの The Flannery O'Connor Society その他内外の関連学会との連携
4. その他必要と認められる事業

第4条 本会の会費は第2条の趣旨に賛同し、所定の会費を納入するものとする。

1. 会員は、普通会员・賛助会員・学生会員の三種類とする。
2. 会費は年額とし、次の区分による。
3. 普通会员 ¥4,000 学生会員(博士課程まで) ¥1,000 賛助会員 ¥10,000 以上

第5条 本会に次の機関を置く 総会 役員会

1. 総会は本会の最高議決機関であり、毎年1回会長が招集する。
2. 役員会は役員をもって構成し、本会の運営にあたる。役員会は必要に応じ各種の小委員会を設けることができる。

第6条 本会に次の役員を置く。役員の任期は3年とし再任を妨げない。

会長1名 副会長1名 事務局長1名 幹事若干名 監査2名

1. 役員は総会において会員が互選する。
2. 役員の役職は、総会において役員が互選する。
3. 会長は本会を代表して会務を統括し、副会長は会長を補佐する。
4. 幹事は事務局長の職務を補佐し、会務を執行する。
5. 監査は本会の財務および会務執行状況を監査する。

第7条 本会に顧問を置くことができる。顧問は役員会の推挙により、会長が委嘱し、会長及び役員会の諮問に答える。

第8条 本会の経費は会費及び寄付金により支弁する。本会の会計年度は毎年1月1日から12月31日までとする。

第9条 本会則の改正は総会の承認を経なければならない。但し、附則の事務局に関する箇所については、事後承諾とすることができる。また改正年月日の記入も省略することができる。

附則 1. 本会の準備委員会を平成 24 年 8 月 3 日, 日本大学理工学部に於いて発足する。

附則 2. 本会の事務局を平成 25 年 3 月 25 日より, 千葉県船橋市習志野台 7-24-1 日本大学理工学部一般教育教室英語系列 中村文紀研究室に置く。

附則 3. 会則は平成 25 年 3 月 25 日から施行する。

附則 4. 本会の事務局を平成 28 年 3 月 26 日より, 暫定的に神奈川県横須賀市走水 1-10-20 防衛大学校総合教育学群外国語教育室 田中浩司研究室に置く。

附則 5. 本会の事務局を平成 29 年 3 月 25 日より, 東京都八王子市東中野 742-1 中央大学文学部英語文学文化専攻 久保尚美研究室に置く。

附則 6. 平成 30 年 3 月 17 日の総会にて本規約の第 4 条の 3 及び第 8 条の改訂, 第 4 条の 4 の削除, 会誌「投稿規定」の規定 1 及び 3 の変更, 「執筆要項」5 の削除が承認された。

附則 7. 令和 3 年 3 月 20 日の総会にて会誌「投稿規定」の規定 1 について, 以下のように改訂することが承認された。

「本誌は, フラナリー・オコナー協会の学会誌であり, オンライン・ジャーナル (不定期) として発行する。」

【投稿・執筆規定】

◆投稿規定◆

1. 本誌は、フラナリー・オコナー協会の学会誌であり、原則として年に1回オンライン・ジャーナルとして発行する。
2. 投稿原稿は、フラナリー・オコナーに関連する論文とし、未発表のものに限る。但し、学会で口頭発表したものについては、その限りではない。その旨を注に明記すること。
3. 応募締切 毎年7月末日 原稿提出締切 毎年10月末日
4. 原稿送付方法 原稿をワードの添付書類としてメールで編集責任者に送ること。その際、略歴（所属学校・機関、身分）をメールの本文に記入すること。
5. 原稿採択方法 査読委員による査読を経て決定する。
6. 校正 校正は2校までとする。初校は1週間以内、再校は3日以内に返送すること。
7. 上記以外の案件については、協会役員会における判断が優先される。

◆執筆要項◆

1. 字数 和文論文は12,000字程度、英文論文は7,000語程度を目安とする。
2. 書式 和文はMS明朝、英文はCenturyとし、いずれもフォントは12ポイントで横書きとする。
3. 本文の注記
 - a) アラビア数字を用い、文末注（後注）とする。
 - b) 外国の人名・地名・書名は、初出の箇所日本語の後ろの（ ）内に併記する。
4. 書式の詳細については、『MLA 新英語論文の手引き』（北星堂）、*MLA Handbook for Writers of Research Papers*の最新版を参照のこと。

【活動報告】

◆第7回大会（オンライン）

日時：令和3年3月20日（土）15:00～17:00

I 開会の言葉・会長挨拶（15:00～15:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京 名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（15:10～16:30）

研究発表：Parker's Back to the Garden

発表者：吉岡リサ氏（川崎医療福祉大学 特任教授）

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

III 総会（16:30～16:50）

司会：田中 浩司氏

会計報告：久保 尚美氏

事務局より：久保 尚美氏

IV 閉会の言葉（16:50～17:00）

田中 浩司氏

◆令和3年 夏の読書会（オンライン）

日時：令和3年8月21日（土）午後13:00～15:00

対象作品：“A Good Man Is Hard to Find”

◆日本フラナリー・オコナー協会第8回大会（オンライン）

日時：令和4年3月19日（土）14:00～16:00

読書会（14:00～15:50）

対象作品：“Good Country People”

総会（15:50～16:00）

会計報告、事務局より

◆第9回大会

日時：令和5年3月17日（金）14:00～17:00

場所：中央大学 多摩キャンパス 3号館 3257 教室

I 開会の言葉・会長挨拶（14:00～14:10）

日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京名誉教授）

司会：久保 尚美氏（中央大学 准教授）

II 研究発表（14:15～14:45）

「フラナリー・オコナーの特異性

—アメリカ女性作家に関する計量分析的研究—

発表者：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

司会：久保 尚美氏

III 読書会（14:50～16:30）

対象作品：Flannery O'Connor, “The Enduring Chill”

司会：亀田 政則氏（福島県立医科大学 名誉教授）

IV 総会（16:35～16:50）

司会：田中 浩司氏（防衛大学校 教授）

会計報告：久保 尚美氏

事務局より：久保 尚美氏

V 閉会の言葉（16:45～16:55）田中 浩司氏

令和5年夏の研究会・読書会

日時：令和5年8月19日（土）（14:00～16:30）

場所：中央大学 茗荷谷キャンパス 2E05 教室

開会の言葉・会長挨拶 日本フラナリー・オコナー協会会長 野口 肇氏（首都大学東京・名誉教授）

第1部 研究発表「ゲームの中の文学—Night in the Woods におけるフラナリー・オコナーの影響」

発表者：関根 金太郎氏

司会：田中 浩司氏（防衛大学校・教授）

第2部 “A View of the Woods” 読書会

【編集後記】

本協会は今年 3 月で創設 10 年目を迎えます。コロナ禍の最中にも読書会や大会を開催し、毎年細々とながらも、今日まで続けて来られたのは、ひとえに会長・事務局長、そして会員の皆様のお陰です。

本協会は、研究者や学生だけでなく、社会人・主婦等、一般の方々にも開かれた学会です。研究会や読書会では、文学を難しい言葉で語って、参加者を煙に巻くようなことはしません。むしろ、一読しただけでは理解し難いフラナリー・オコナーの作品をわかりやすい言葉で解きほぐし、その作品を読んだことのないような人たちにも理解し、興味を持って頂くことが大切であると考えています。オコナーの作品はそれほど多いものではありませんが、どんなに掘り起こしても掘り尽くすことのできない源泉、不条理な世の中や人生を生きる上で糧となり得る知恵や恵みがそこにはあります。

このようにウェブ上に協会誌を掲載するのは、本協会の活動や研究内容を、会員以外の一般の方々にも広く知って頂くためでもあります。会員の方々は勿論、一般の方々も、今回発行されたこの会誌に掲載された論文をお読みになり、興味をお持ちになりましたら、あるいは、よくわからないこと、疑問に思うことなどがありましたら、ぜひ一度研究会・読書会に足をお運びになって頂ければと思います。

副会長 田中浩司

【執筆者紹介】

野口 肇（首都大学東京 名誉教授）

亀田 政則（福島県立医科大学 名誉教授）

『フラナリー・オコナー研究』第3号

The Journal of Flannery O'Connor, vol. 3.

ISSN 2188-9716

2023年12月31日発行

発行者 日本フラナリー・オコナー協会

[事務局] 〒192-0393 東京都八王子市東中野742-1
中央大学 文学部 英語文学文化専攻 久保研究室内